大正二年一月二十日發行

婦人衛生雜誌

第二百七十一號

婦人衛生雜誌

第二百七十八號目次

講演

○光の話　ドクトル　藤浪剛一

叢談

○牛痘法の普及
○不死不滅
○うしの肉

育兒

○牛乳で育たぬ小供
○小兒の結核
○牛の結核と人の結核
○育兒者の心得概略(承前)

家庭衛生

○何の爲に衛生を行ふか
○卵の榮養價に就て

雜錄

○諒闇中の年始狀
○麹町診療所設置
○細民部落の改善
○赤十字の金員寄贈
○小公園設置計劃
○東京出獄人保護現況
○濟生會の現況

廣告

○婦人衛生會例會○本會入會者○轉居

婦人衛生雜誌（自第二七八號至第二八九號）目次

婦人衛生雜誌(自第二七八號 至第二八九號)目次

講演

○光の話……………ドクトル　藤浪剛一　(一月)…一
○婦人の衛生思想……醫學博士　片山國嘉　(二月)…一
○日本の産婦と西洋の産婦　醫學博士　磐瀬雄一　(三月)…一
○人體自然の防備……醫學博士　遠山椿吉　(四月)…一
○衛生歌(保良人)……………………　(五月)…一
○脊柱の彎曲……………醫學博士　田代義徳　(六月)…一
○結核豫防に就て………醫學博士　岡田和一郎　(七月)…一
○胃腸の養生…………醫學博士　南　大曹　(八月)…一
○ドレスデン萬國衛生博覧會見聞談　藥學博士　石津利作　(九月)…一
○妊娠、分娩、産褥の攝生法　醫學博士　樋口繁次　(十月)…一
○米の話……………醫學博士　遠山椿吉　(十一月)…一
○新しき女の根本義に就て……中島徳藏　(十二月)…一

叢談

○牛痘法の普及……………………　(一月)…一三
○不死不滅…………………………　(一月)…一六
○うしの角……………………………　(一月)…一〇
○神經病者は結婚して可なるか……　(一月)…一三
○非醫者とは何ぞや…………………　(二月)…五
○貧血と補血藥………………………　(二月)…八
○結核患者に對する注意書…………　(二月)…一四
○身體美と衣服………………………　(二月)…一八
○左手利の養成………………………　(二月)…一三
○家事衛生……………………………　(三月)…一六
○家庭と結核…………………………　(三月)…一九
○貧血と補血藥(承前)………………　(三月)…一五
○左手利の養成(承前)………………　(三月)…二〇
○森林と衛生…………………………　(四月)…一七
○少女衛生の必要……………………　(四月)…一三
○上流の婦人に多き病………………　(四月)…一六
○貧血と補血藥(承前)………………　(四月)…二〇
○感冒に對する自然の保護裝置……　(五月)…一三
○飲食物の温度に就て………………　(五月)…八
○森林と衛生(承前)…………………　(五月)…二
○上流婦人に多き病(承前)…………　(五月)…一五
○初夏の衛生…………………………　(六月)…一九
○臥位に就て…………………………　(六月)…一五
○妊婦の口内…………………………　(六月)…二四

○蚊刺の豫防及治療法……（六月）…三六
○海へ海へ……（七月）…二七
○仕事と疲勞……（七月）…二九
○新しい空氣……（七月）…三六
○維納訓盲院夏季旅行……（七月）…一〇
○O脚とX脚……（八月）…一七
○天氣と氣分……（八月）…三三
○破れぬ硝子……（八月）…二四
○婦人衞生と精神作用との關係……（九月）…二九
○病原菌の侵入門……（九月）…三三
○動物の毒の話……（十月）…三五
○睡眠に就て……（十月）…二一
○鼻の病……（十月）…二六
○オハグロに就て……（十月）…二九
○尙美心……（十一月）…三五
○冬仕度……（十一月）…一八
○心臟の仕事……（十一月）…二一
○婦人の神經質……（十一月）…三五
○鼻の病（承前）……（十一月）…二六
○婦人衞生上の危機……（十二月）…三六
○婦人の神經質（承前）……（十二月）…三〇

育兒

○牛乳で育たぬ小供……（一月）…二六
○小兒の結核……（一月）…一八
○牛の結核と人の結核……（一月）…三三
○育兒者の心得概略（承前）……（一月）…三五
○自然と兒童……（二月）…二六
○牛乳消毒器の危險……（二月）…三三
○兩親の飲酒と子孫の癲癇……（二月）…三三
○病兒看護の要領（承前）……（二月）…三六
○言語の衞生……（三月）…二四
○育兒者の心得概略（承前）……（三月）…二七
○育兒法を學ぶの要……（四月）…三三
○異常兒童……（四月）…二六
○敎子訓……（四月）…二九
○哺乳兒の鼻詰り……（四月）…四〇
○兒童の救急手當法……（五月）…一九
○痲疹の話……（五月）…二九
○小兒の仕事振り……（五月）…二三
○子供のカユイ〱……（五月）…二六
○齒牙の發生……（五月）…二八
○小兒の排泄物……（五月）…四〇
○兒童の發育と貧富……（五月）…四一
○兒童の身體……（六月）…二九
○兒童の救急手當法（承前）……（六月）…四一

○小兒の食物（澱粉）消化力……（七月）…三九
○小兒耳の衞生……（七月）…四三
○兒童の身體（承前）……（七月）…四八
○呪はれたる兒……（八月）…三五
○兒童の身體（承前）……（八月）…四〇
○氷を食べては何故いけなの？……（八月）…四二
○兒童救急手當法（承前）……（八月）…四三
○重湯、粥、飯、餅等を小兒に與ふべき時期に就て（九月）…二七
○呪はれたる兒（其二）……（九月）…二〇
○兒童救急手當法（承前）……（九月）…三八
○育兒上の軟派と硬派……（十月）…三三
○小兒室の燈火……（十月）…四四
○呪はれたる兒（其三）……（十月）…三八
○思が仇……（十一月）…三九
○呪はれたる兒（其四）……（十一月）…四四
○病氣に罹らぬ乳兒……（十二月）…三三
○呪はれたる兒（其五）……（十二月）…四一

家庭衞生

○何の爲に衞生を行ふか……（一月）…三九
○卵の榮養價に就て……（一月）…四二
○瓦斯中毒者の手當……（一月）…三七
○養老の注意……（二月）…四二
○食事の注意……（三月）…四七
○脫臼骨折時の注意……（三月）…五一
○牛乳嫌の人に牛乳を與へる法……（三月）…五三
○野菜の消化に就て……（四月）…四二
○滿腹の感……（四月）…四二
○榮養品としての魚肉……（四月）…四三
○肝油を飮む法……（四月）…四三
○睡眠時の身體の位置……（四月）…四四
○月經時の衞生……（四月）…四六
○鼻血を止める法……（四月）…四七
○市中販賣の毛染劑……（四月）…四八
○急性中毒の手當……（四月）…五一
○衞生上より見たる茶の湯……（五月）…四三
○ヨグールト……（五月）…四五
○束髮止の醫術的應用……（五月）…四九
○牛肉の等級……（五月）…五一
○毛髮の衞生……（五月）…五二
○含鐵鷄卵……（五月）…五三
○病人の食餌攝取に就て……（六月）…四五
○シャクリ止めの法……（六月）…四八
○看病上に於ける蚊帳の應用……（六月）…五〇

○布巾の檢查……（七月）・五〇
○日焦の豫防……（七月）・五三
○顏面の痲腫……（七月）・六四
○小さな損傷……（八月）・四八
○茶と咖啡……（八月）・四九
○日燒の妙藥……（八月）・五一
○眼鏡の選擇……（九月）・四一
○蠅を退治せよ……（九月）・四三
○地震、雷、火事、親父……（九月）・四六
○病室の整頓……（九月）・四八
○鼻加答兒の療法……（九月）・四九
○頓醫方……（九月）・四九
○糠味噌は不潔物か……（九月）・五一
○松茸の中毒……（十月）・四〇
○感冒の療法……（十月）・四三
○通經劑に就て……（十月）・四六
○砂糖の應用……（十月）・四八
○眼鏡の選擇（承前）……（十月）・四八
○乳を分泌する法……（十一月）・三八
○學校及家庭に於ける簡易衞生……（十一月）・四三
○冬季の寢食……（十二月）・四九
○女中さんの手……（十二月）・四七

質疑

○梅干の效能に就て……（八月）・五一
○汗知らずの處方に就て……（八月）・五三
○小兒の鼻血に就て……（十月）・五〇
○ちゞれ毛に就て……（十一月）・五三

雜報

○諒闇中の年始狀……（一月）・四四
○麴町區診療所設置……（一月）・四五
○細民部落の改善……（一月）・四五
○赤十字の會員寄贈……（一月）・四五
○小公園の設置計劃……（一月）・四六
○東京出獄人保護現況……（一月）・四六
○濟生會の現況……（一月）・四七
○牛乳中の亞砒酸……（二月）・四二
○不良少年と家庭……（二月）・四三
○結婚及離婚統計……（二月）・四三
○渡米者腸寄生蟲檢查……（二月）・四四
○避暑保養所の成績……（二月）・四四
○獨英兩國の看護婦界……（二月）・四五
○第五回兒童博覽會……（三月）・五三

○文部省の「トラホーム」調査……（三月）…六四
○看護婦長講習會……（四月）…五三
○產婆養成科指定……（四月）…五三
○米國大使の寄附……（四月）…五三
○東京市の細民……（四月）…五三
○虎列剌有病地指定の解除……（四月）…五四
○濟生會東京診療所の成績……（四月）…五四
○衛生功勞者の獎勵……（四月）…五四
○看護法私費講習生募集……（四月）…五四
○鼠の價……（四月）…五九
○京都市學校醫會幹事會……（四月）…五五
○大日本學校衛生協會發會式……（四月）…五九
○託兒場の新設……（五月）…五四
○盲兒幼稚園……（五月）…五五
○衛生活動寫眞……（五月）…五六
○小公園の新設……（六月）…五一
○淸凉飲料水の細菌……（六月）…五一
○下谷保育所……（六月）…五二
○九州大學產婆養成所……（六月）…五二
○回歸熱の流行……（六月）…五二
○理髮業者の衛生講話……（六月）…五三
○天然痘患者現はる……（六月）…五二
○櫻楓會の託兒所經營……（六月）…五三
○下關幼稚園醫會……（六月）…五四
○岡山縣の衛生展覽會……（六月）…五四
○篤志看護婦人會總會……（六月）…五九
○救世軍の結核病院計劃……（六月）…五五
○看護婦實地試驗……（六月）…五六
○肺結核豫防の訓示……（七月）…五五
○海外防疫官設置……（七月）…五五
○大學外來診察日變更……（七月）…五六
○通俗衛生普及機關……（八月）…五三
○工女結核調查……（八月）…六四
○私立病院の增加……（八月）…五四
○工場衛生の統計……（八月）…五四
○市內堀井戶の水……（八月）…五四
○人生の禍根……（八月）…五五
○大貯水池の計劃……（八月）…五九
○住宅改良問題……（八月）…五九
○女醫會……（八月）…五六
○新賣藥取締規則……（八月）…五六
○日本人の身長增加……（九月）…五二
○電氣に關する注意……（九月）…五二
○海上の出產……（九月）…五三
○山梨縣の家庭衛生講習會……（九月）…五三
○傳染病傳染經路の掛圖……（九月）…五四

○火葬場の市營案……………（九月）…五四
○秋蒔草花種子の無代配布……………（九月）…六四
○日本赤十字社京都支部の避暑保養所……（九月）…六九
○東京府の看護婦試驗……………（十月）…五一
○大阪弘濟會の子供預所……………（十月）…五一
○嬰兒展覽會……………（十月）…五二
○驅鼠船の新造……………（十月）…五二
○殉職看護婦追悼會……………（十月）…五三
○名古屋藝妓身體檢査成績……………（十月）…五三
○東京市の狂犬……………（十月）…五三
○濟生會の巡廻治療班……………（十月）…五四
○變死者の統計……………（十月）…五四
○學校衛生問題調査……………（十月）…五四
○感化救濟事業講習會……………（十月）…五五
○濟生會巡廻診療班……………（十一月）…五三
○飛行機に對する公衆の注意……………（十一月）…五四
○看護婦扶濟會……………（十二月）…四八
○子供の好き嫌ひ……………（十二月）…五〇
○有毒化粧品……………（十二月）…五〇
○大阪子守慰安會……………（十二月）…五一
○製絲工女と不就學兒童……………（十二月）…五一
○兒童娛樂研究會の設立……………（十二月）…五一



私立大日本婦人衞生會

二月例會通知

來る二月一日(第一土曜日)午後一時半より神田區一ツ橋通り共立女子職業學校内に於て本會例會相開き左の講話有之候に付き萬障御繰合はせ御來會被下度候也

お米の話

醫學博士　遠山椿吉君

大正二年一月

私立大日本婦人衞生會

前髪心の覇王　美人印ヘーヤロール

弊店製造の特許ヘーヤロールは原料を遠く濠洲に仰ぎ新歸朝者美容術界の明星たる岡崎エン子女史が母國への土産として持ち來りしものに大改良を加へ衛生と經濟とを兼備したる逸品なる事貴婦人界既に定評あり

ヘーヤロール前髪心壹個の目方

壹尺	中	貳匁四分
壹尺貳寸	大	三匁四分
壹尺五寸	極大	五匁五分





叢談欄牛痘法の普及參照

（大正二年一月二十日發行）

講演

光の話

ドクトル　藤浪剛一

私の今日申します御話は、廣い意味に於ての光で、此光が何うして醫學上に應用されて來たかと云ふ歷史或は實驗等に付て申して、それから今日は何う云ふ點にまで此光の研究が進んで新しい現象が科學の世界、言換れば理學竝に醫學の方面に應用されて居るかと云ふ事を申します。

私共の生活或は私共の生命、私共の精神上に、如何に光の働きが必要であるかと云ふことは、もう私共が茲に言ふの必要はありませぬ、彼の有名な獨逸の詩人のゲーテが死ぬ時に何と言ひましたか、彼の豪い大詩人でも死ぬ時には「もう一度光りが見たい」、もつと明りが欲しい」と言つて死にました、又千八百年頃でありますが瑞典の北極探檢隊が北極を探檢した時の報告書を見ますと、北極の方で冬になつて全く光が見えない時と、それから夏になつて終日終夜光が見えて居る時と此二つの時期に於ける探檢隊員の精神上の働き、竝に肉體上の働きと云ふものは全く違つて居つた、冬になつて終日全く光を見ない時の探檢隊員の體竝に其精神と云ふものは非常に衰弱して、元氣もなく勇氣もなかつた、ところが一陽來復、春と共に太陽が再び北へとさして來て其光を見ますると共に、探檢隊の勇氣竝に其體が非常に活潑になつて來たと云ふ報告があります、斯う云ふ事を見ましても光が如何に私共の生活、私共の精神上及身體の上に關係して居るかと云ふことが解ります、斯う云ふやうに光が人間に必要である

と云ふことは、古來から人類の先祖は經驗して居つたのでありまして、彼の羅馬、希臘などの時代に於て、既に光を身體の健康上に、或は病氣の治療に使つて居つたのであります、歴史の記事に由つて見ますと埃及の時代或はもう少し古い波斯の盛なる時代に於て既に太陽浴と云ふものが發見された、此太陽浴とは何う云ふものであるかと云ふに、河岸或は海岸に行きまして、太陽の赫々と照つて居る下の砂を堀つて、凹みを拵へ、其處を十分に乾かしまして其穴の中に人間が入つて、太陽より受けた砂の温味で體を温めて病氣を治すと云ふのであります、所が此方法は太陽と砂と兩方でやつたのでありますが、太陽の光のみでやる方法があります、太陽でやる方法は、家を一軒造りまして、其床の上に病人或は健康な人が臥て赫々と輝く太陽の光を受けて居つたのです、更に羅馬の時代に於ても、醫學の書籍にはどう云ふ病氣が太陽の光に由つて癒ると云ふ明細な條件が書いてあります、之を譬へて申しますると、新陳代謝病、例へば痛風であるとか、僂麻質斯であるとか云ふやうな病氣に太陽浴が效能があると云ふことを申して居ります、慢性の皮膚病、貧血病等が太陽の光で治療が出來ると云ふことを既に羅馬人が說明して居ります、アラビヤの俚諺に沙漠では髭が餘計生へると云ふことがあります、それはどう云ふ事かと申しますると、殊に夏には爪とか或は髮毛が春や秋より早く長くなる、成長すると云ふことがアラビヤ人の頭に自然々々に現はれて、斯う云ふ俚諺が出來たのでありませう。

もう一つ光が如何に人間の身體或は動物に必要であるかと云ふことを申しますと、蛙を箱の中に入れまして、一方は明るい所に置き、一方は暗所に置きますと炭酸瓦斯の排泄量が非常に違ふ、明るい所に置いた蛙は炭酸瓦斯の排泄量が非常に澤山ある、之に反して暗い所に置いた蛙は炭酸瓦斯の排泄量が非常に少い、是は何う云ふ點からして一方は多く一方は少いかと申しますると、蛙の皮膚が太陽の光線を

受け、さうして化學的變化を起す現象、即ち物質新陳代謝と申しますが、さう云ふ作用が明るい所では烈しく起り、一方の暗い所では此代謝の機能が少いと云ふ理由の下にさう云ふ差異が起るのでありますで斯う云ふやうに光、光と申しましても太陽の光が人間の體に非常に效能があると云ふことが段々分つて來ました。

ところが年百年中、毎日晴天と云ふ譯にはいかない、或時は曇り或時は雨が降ると云ふ爲に、茲に何か太陽の光りと同じ强さを有つたものを太陽の代りに使ひたいと云ふ希望が起つて、千七百八十六年でありますが亞米利加の御醫者さんがそれを考へついた、別に立派な、或は突飛な考ではありませぬ、普通の電氣燈を使つてさうして電氣燈の光で身體の病氣を癒さうと云ふのであります、此電氣燈を使つて身體の病氣を癒すと云ふ方法は、一つの箱を作りまして、其中に普通に使ひます十燭若くは二十燭の電燈の球を三十二、或は四十八程點けまして、さうして其箱の中に人が入つて首だけを外に出して一時間か二時間入つて居る、さうすると全身から汗が出ます、一方には寒暖計が入つて居つて何度の溫度では此位の汗が出ると云ふことの下に、何時間と時間を定めて入つて居ります、さう云ふ方法で大變成績が良いものですから、今日歐羅巴では光線療法と云ふ中の電氣の光で治す方法、即ち電氣光浴の方法を漸次改良致しまして、慢性の皮膚炎例へば疥癬とか或は非常に全身が痒いとか、或は僂麻質斯とか其他心臟の病氣と云ふやうな血液の病氣をも今日は癒すやうになつて來ました、其他西洋では、直接に太陽の光線で治す日光浴も盛に行はれて居ります、此日光浴の方法は四方硝子張りの室を拵えて、さうして北の方はすつかり塞ぎまして、南の方から太陽を受けるやうにして、其處にベットを敷いて其上に裸體になつて出て居る、今日西洋でこう云ふ方法を盛にやつて居る、有名な所を申しますと、瑞西のチューリッヒと云ふ都會の側にある光線浴場は世界最大の浴場で

あります、光と云ふものは私共人間に取つて非常に大切なものである。

ところが果して此光は私共の生命、或は身體に有要であり又必要なものである、卽ち光萬能のものであるかと云ふとさうでない、光は人間に取つて有害な場合があります。どう云ふことが有害であり又どう云ふ風に有害の作用が起つて來るかと云ふ問題は千七百九十六年に獨逸のゲッチンゲンの醫科大學から懸賞論文が出て居ります、此懸賞論文は光の研究に取つては非常な必要な論文でありまして、此論文がありましてから光に害があると云ふことが解つて來ました、でどう云ふことで其光が我々の身體に害を與へるかと云ふ一例を申しまするど、彼の日燒であります、皆さんが何處か御歩きになると顏が黑くなる、此顏の黑くなるのは光の有害な作用であります、日本人では光りに照されて色が黑くなると云ふだけでありますけれども歐羅巴人のやうな白皙人種に於きましては此光に依て受ける害は非常なものであります、例へば西洋人が日曜日などに遠足をしまして朝出て晩に歸りますと日に曝された皮膚が一面に赤くなります、さうして非常に痛む、甚しい人になりますと皮膚が水腫れになる、三四日或は五六日經つと初めて痛みを去り或る赤い色も減じて其色が變つて黑くなつて來る、是は慥に光りの人間に及ぼす有害の一つであります、それから此光の害は、直接に私共が光を受けて起るのみならず、直接に太陽の光線に當らないでも間接に起ることがある、例へば西洋…日本ではありませぬけれども西洋人はよく冬に雪の山を歩くことがある、例へば瑞西のアルペン山に旅行をするものが澤山あります、さう云ふ時に若い人が腕を捲くり或は顏を晒して行きます、勿論冬で太陽の光も強くない、寒ひ日で太陽が雲の爲に蔽はれて居るから日光其物には當りませぬけれども、雪の反射の爲に先刻申上げたやうに皮膚が痛むとか、赤くなつて時に腫れて來る、甚しい時には水疱を造ると云ふやうな現象が屢〻あります、斯う

云ふやうに光の有害作用が起つて來ます。

然らば何處で光の有害作用が起るかと申しますると、是は有名なるフインゼンと云ふ人が千八百九十二年に立派な報告を致しました、それは彼の有名なるノーブルの賞金を貰つた報告であります、フインゼンと云ふのは何處の人かと云ふと丁抹の有名な開業醫者であります、此人が或夏自分の腕に墨で字を書きまして、其側の皮膚の一部分だけを晒らしあとの全體を包んで、約二時間程日光に曝して、墨を洗ひましたところが翌日になりますと墨で字を書いた所だけは白く殘つて、他の部分は非常に眞赤になつて居りました、其次にもう一遍フインゼンは、自分の腕で同じやうな試驗を致しました、其試驗は色硝子を小さく切りまして、それを自分の腕の上に竝べ置いて試驗をしたのであります、それは第一に水晶の板、其次に普通の硝子、其次に黄、靑、赤、紫、等の色硝子を自分の腕の上に置きまして同じ様に太陽の光線に曝しましたら、さうしましたらば僅か、二時間後に於きまして手が非常に眞赤になつて、さうして多少痛みがあつた、ところが其痛みは三時間後には全く消失しました、併し翌朝になつてからまた痛出しました、ところが其痛みは前と反對に前に赤くなつて居つた處には痛みがなくして、前に白かつた所に痛みが起つて來た、其痛みの起り方は、硝子のある處に由つて違つて居つた。一番痛みの烈しい處は水晶の板を張つた所で、其次に紫の硝子を張つた處が痛みが多うかつた、赤い硝子を張つた所には別に左程の痛みが無かつた、斯う云ふことを先生が實驗しました、で是は光の研究上非常に有益な實驗であります、それで此事實から考へて見ると、光の或成分が我々の體に害を與へ、或ものは害を與へないと云ふ一つの證據になつて居ります、それで皆樣も御承知の通り三稜塔を以て普通の明るい光を分析しますと一つの色帶が出ます、一方には赤い帶、それから黄になり橙黄、靑、藍、綠一番終ひに紫の帶が出て來ます、この色の帶をもう少し深く研究して

見まするど云ふと(圖を描きて示す)此處に赤いのがあり此處に紫がある、さうして此赤い方に寒暖計を置きます、寒暖計と申しましても普通の寒暖計より尚ほ細密に何萬分の一の温度の分る寒暖計とこの寒暖計を置きますと、其寒暖計の温度がずつと上つて來ます、此寒暖計を段々と紫の方へ持つて行くと温度が下つて來る、之に反して赤の外へ寒暖計を持つて來ると又ずつと上がると云ふ現象が起る、又一つ紫の帶の方に私共の使ひます、寫眞の板を置きますと紫の帶の處で寫眞板が感應する、尚此板を紫の外へ持つて行きますと寫眞の感應度が非常に高くなるで私共は赤い方のものを赤線、其外にあるものを赤外線と云ひ紫の方を紫線、其外にあるのを紫外線と申しますが、光を分析して見ると、一方のは温度を出し、一方のは一種の化學的變化を起す作用が分ります、此兩線の中間に出て居るのが黄な部分、此帶は普通私共の物を見ると云ふ作用を有つて居るものであります。

それで今申しました色の中で赤い方は私共が日光を受けて温味を感ずる方であります、又紫の方は私共が日光に曝らされると色が黒くなると云ふ方の作用を有つて居ります、それで皆様が日光に曝されると色が黒くなる、殊に夏には色が黒くなると云ふ御心配がありませうが是は夏ばかりではありませぬ、何時でも色が黒くなる、寒い時でも紫の線の爲に色が黒くなります。

けれども歐羅巴人が印度或は赤道直下の方に行つて居りますと、彼の白い者が段々と色を帶びて多少黒味を帶んで來る、之に反して黒奴が北極の近く、歐羅巴の北の方に行くと墨のやうに黒い色が漸々白くなつて來ると云ふことであります、よく東北美人などゝ言つて、東北の人は色が白いと云ふことも、恐らくは東北は北に寄つて居り薩摩或は九州の方は南に寄つて居る爲に、太陽の光線の受け方に由つて色の黒い白いと云ふことが出來るのだらうと思ふ、たから新潟美人、秋田美人と云ふことは聞きますが薩

摩美人と云ふことは聞いたことがない、是は恐らくは南と北に寄つて居る爲に受ける光の作用で違ふのであらふと思ひます。

日燒と云ふものは前に申上げたフインゼンの試驗で二つの事を知りました、一つはフインゼンが經驗したやうに日光を受けてから一時間後に發するものと、一つは十二時間も二十四時間も經て起るものと此二つがあります、普通私共の言ふ日燒と云ふのは此紫及び紫外線、卽ち化學線に由つて起つたものであります、溫線の方で受けた日燒は直きに癒ります、二時間三時間經てば全く無くなつて仕舞ひます、光は紫外線が害を與へると云ふことをフインゼンが其實驗に依つて知つて、此紫外線を除外して疾病を治すと云ふ方法を考へつきました、手近い例を申しますと天然痘であります、天然痘の時には日本でも支那でも赤い紙をお禁厭に使ふと云ふことを知つて居ります、何故赤い紙を使ふかと云ふことは餘程面白いことで、此天然痘は西洋人にも黑奴にも同じやうに起つて居りますが、西洋人の方は顏面と手だけに發します、所が黑奴は體全體に出來て來る。言換れば西洋人は身體の衣服を蔽ふて居る部分には天然痘が少い、こそでフインゼンは是は屹度身體の包んである部分には光線が當らぬからして、天然痘が體全體に出來ないのであると云ふことを考付きまして、此有害なる紫の線を除去したならば宜いだらうと云ふことで、フインゼンが天然痘の患者を集めて、其部屋の椽周圍から壁から、牀から、臥て居るベットから、一切を赤の色を以て塗つた部屋に患者を置いて治療しましたら非常に天然痘の經過が好くなつた、詰り天然痘は紫外線がある爲に惡くなる、自然的の經驗から、日本、支那、暹羅、印度あたりでも天然痘の御禁厭に赤い紙を使ふと云ふことが行はれたかと思ひます、尙此外に日光に因つて害を受ける病氣があります、例へば雀斑が非常に澤山あつて、それからお腫物が出來て來る病氣があります、ひどい時には癌などが出來て來る色素性乾皮症と云

ふやうな病氣に於ては、日光の光線の爲に惡くなるからこれを防ぐに赤いものを塗る、エォージンを塗つたりして療法をする方法がありますが、斯う云ふやうに紫外線を除いてやる方法を陰性光線療法と申します、之に反して紫外線を以て治療する方法を陽性光線療法と申します。

それで此紫外線を集めて、それを以て治療することは近來非常に進歩いたしました、狼瘡は皮膚に結核菌が入つて、段々大くなつて膿を有つて四方に擴つて來る、中々普通の藥などでは癒らぬ病氣であります、それが紫の光線を以て治療すると大變快くなる、それは先刻申しましたフインゼン先生の發明した機械で私共はフインゼンランプと申して居りますが皆さん御承知の市街に點けて居ります、二千乃至三千燭アーク燈の光を水晶のレンズを以て集め、其集めた強い光で狼瘡と云ふやうな病氣を癒します、此狼瘡は幸に日本では餘り多くはありませぬから結構でありますが、西洋では是が非常に多い爲に、政府或は慈善事業として狼瘡の治療所が澤山出來て居ります。フインゼンランプを使つて治療をやるのは經濟上非常に金が懸るので、多くは政府の事業、慈善事業としてやつて居ります、で此紫外線が治療上非常に有效であるからしてどうか紫のみの光を出すランプを造りたいと云ふので多くの學者が研究致しまして、今日それの出來たものがあります、それは水晶で作つた硝子管であります。（圖を描きて示す）此中を眞空に致しまして、其兩端に電氣の陰極と陽極とを通し内に僅かの水銀を入れて、電氣を通じますと、水銀が電氣の爲に蒸發して來る、蒸發した中に紫外線を放散致します、このランプを紫燈と申して居りますが、斯う云ふランプを以て治療することが近代の流行になつて居ります、それでどう云ふ病氣が紫燈を以て癒るかと申しますると、非常に痒い病氣或は禿頭病、或は濕疹、或は皮膚に來たところの結核、さう云ふやうな病氣を十分に癒すことが出來る、此紫燈は日本では大學の土肥先生の所に來て居

るだけでございます。
斯う云ふやうに光線の應用が漸次廣くなつて來たときに千八百九十五年に不思議な報告が獨逸のウルデンベルクの理科大學から出ました、それは有名なレントゲン先生に由つて不思議な現象が報告されました、それは普通の電氣燈の球の中の空氣を非常に少くして、さうして其中に電氣を送りまする或一種の光が出る、其光は吾々の體を透視して、物體に觸れて初めて色が出來ると云ふ不思議なものであります、其當時はどう云ふ作用で此不思議な現象が起つて來るかと云ふことを知らないものですからエッキスと云ふ名前をつけた、是が即ちエッキス放線の起つた初めであります。今日はエッキス放線と言はずレントゲン線と云ふのは、それを發見したレントゲン先生の名前を取つてレントゲン線と云ふ新らしい言葉が出て來たのであります、此レントゲン線或はエッキス線と云ふのはどう云ふものであるかと申しますると、總て光は屈曲して放散すると云ふ性質があるのでありますが、エッキス線は、光の法則に全く從はない、必ず眞線狀に進むと云ふ性質があります、第二に普通の光であるならば、物に當つて反射する四十五度の角度を以て反射する是が普通の光の現象でありますところが、此エッキス線は物に當つて反射しない、同じ方向を以て何處までも進む、それと同時に當つた所で四方に同じやうに放線を出す第三にレントゲン線の性質は普通の光線が寫眞に感光するやうに乾板に感光致します、第四には總ての物體を通過する、普通の光ならば物體に當つたならば其先きに進むことは出來ないですけれども、レントゲン線は此机の板なら板を通して下へ行くと云ふ性質があります、第五にエッキス光線と云ふものは、人間或は動物、或は植物總ての生物の細胞を破壞すると云ふ作用があります、第六にはエッキス光線は自分の目に直接に感じませぬ、普通の光はエーテルの波動に依て眼の奧にある網膜を刺戟して、神經が其刺戟を受けて初めて見えると云ふのですけれども

此エッキス線は私共の眼の網膜を刺戟しない、それですから私共はエッキス線をば見ることが出來ませぬ、然し此エッキス放線は例へば臧化白金バリウムに放射して其バリウムが初めて光を發します、さう云ふ現象を物理學上では複光視と申します、斯う云ふやうないろ〳〵の醫學的の性質を應用して寫眞を撮り或はレントゲン線を以て或病氣を治療し、或はレントゲン線を以て物體を透視していろ〳〵な人體の病氣を診斷すると云ふやうになつて參りました、此レントゲン線が醫者の方に應用されて參りましていろ〳〵眼に見えない、外から十分に知れない病氣が漸次に分つて來ました、今御覽に入れませうけれども、私共が此レントゲンを以て自分の體或は患者の體を診斷します方法と云ふのは技術が非常に難ケしいのですけれども、畢竟寫眞に撮つたり或は見ると云ふことで、十分に診斷が出來ます、今は胃が惡い、腸が惡いと云ふやうなものもレントゲンで十分に診斷が出來て來ましたで、二三のレントゲンの寫眞を御覽に入れます。

今日ではレントゲンの寫眞、或はレントゲンで透して見て治療する方法が非常に進んで來まして、寫眞を撮ることも僅に百分乃至三百分の一秒で撮ることが成效しました、さう云ふやうに早い時間で寫眞を撮りまするど、何う云ふ利益があるかと申しますと、第一子供などは動いて困るのでありますが僅かに百分の一秒或は三百分の一秒で寫眞を撮ります、子供の動く瞬間に十分な寫眞が撮れます、もう一つは心臓とか胃とかは始終動いて居る、それを此早撮寫眞で撮しますと、其動く瞬間の寫眞に鮮明に出て來ます、尚今日は進んで、私共の心臓の運動、或は胃の運動を活動寫眞に撮つて研究する方法があります、實は今日は此處に電燈がありますと皆様に其活動寫眞を御覽に入れやうと思つたのでありますが、電燈が無いと云ふので中止いたしました。

それでレントゲン線は啻にいろ〳〵の診斷をするのみに使ふかと云ふとさうではない、今日では治療の

方にも大變使ひます、此治療をする原因、理由は先刻申しましたが、レントゲン線は生物の細胞を破壞すると云ふ事實からしてそれを治療の方面に應用することになつたのであります、治療の方法は專門的になつて來ますから申上げませぬが、どう云ふ病氣がレレトゲンに依て癒るかと申しまするど、第一御婦人の方で申しますと、子宮の筋腫と云ひまして、子宮にお腫物が出來て大きくなる病氣があります、今まで此子宮筋腫に對して一番早く治療する方法は外科的にお腹を開いて子宮筋腫を取り或は卵巢を採つたのでありますが、今日レントゲンの方法では卵巢にレントゲン線を照射しますと卵巢が段々小くなつて來る、同時に又子宮筋腫自身も小さくなつて病氣が癒つて來ます、斯う云ふやうに子宮筋腫に對するレントゲンの療法は非常に有效なものであります

もう一つは月經異狀或は月經の多い方、さう云ふ御方で今まで御困りになつた人が此レントゲン治療を受けると十分な效果を收めることが出來ます、子宮癌に對するレントゲンの働きは子宮筋腫とか、卵巢の病とか月經異狀とか、月經で出血の多い御方に對する程の效能はないです、けれども子宮癌から起つて來る痛みとか、分泌とかに對してはレントゲン線は早く痛みを去り患者に對して苦痛を去らしむることが出來るのであります、其他の病氣で申しますると、血液の病氣で普通血液の成分が缺けて白血球が多くなる病氣があります、それは何處で起るかと申しまするど、胃の側の脾臟です、脾臟が非常に大きくなることがあります其白血病に對しては今までは唯一の療法としては藥の療法だけでありましたが今日では大きくなつた脾臟にレントゲンを通じますと脾臟が段々小さくなつて其病氣が癒つて來ます、其他何う云ふ病氣であるかと云ふと、總て皮膚の病氣、例へば濕疹とか非常に痒くなるやうな、多くの皮膚病に對して割合に效能あるのであります、其他瘰癧、今まで瘰癧は外科で切つて取つたものですけれども、今日では瘰癧をレントゲンで治療するこが

の出來ます、ところがレントゲンの治療で困りますのは時間の問題です、外科とか其他の方法では割合に早く癒つたものですが、レントゲンでは非常に時間がかゝる、例へば外科で致しますと一ケ月で癒るものが、レントゲン治療では一年乃至二年も三年もかゝると云ふやうなことがある、何故こんなに時間がかゝるかと申しまするど、レントゲンは先刻申すやうに總ての生物の細胞を破壞するもので、生物の細胞を破壞するものならば健康な部分までも破壞するのですから、私共は成べく健康の部分を害せずに病氣の部分だけ破壞したいと云ふ希望からして、さう藥を飲むやうに毎日〳〵やることは出來ませぬ、もう一つはレントゲンが細胞に働く力がそんなに强くない、どうしても時間で長く治すと云ふ方法ですからして、一定の定間を置いてさうして癒さなければならぬ、どうも長くかゝるのがレントゲンの缺點であります。

近來日本でラヂウムのことを大分世間で謂ひますがこのラヂウムは一八九八年佛人キユリー及其奥さんと共同して發見せられたものであります、ラヂウムを採取するにはペッヒブレンデと云ふ鑛石から採るのです、このラヂウムの性質も殆んどレントゲン放線と、同じ樣な性質を持つて居ります、其ラヂウムよりはαβγの性質を異にした三種の放射線を放射します、ラヂウムと同樣の働きを爲すものが自然に放散せられて居る、これをエマナチオンと申します、今日では、温泉へ參りまして病氣がよくなつたと云ふのはこのエマナチオンの作用であると云ふことが分りました、今日ではラヂウムを單體として得ることは出來ない、故に其鹽化物及び臭化物として得らるゝのであります、このラヂウムの働きもX放線と同樣にして從つてそう云ふ所に用ひると謂ふことは同じ樣です、このラヂウムは一匁の何十分の一が百圓もするのですから皆樣が御持ちになつて居る金剛石大のものであつたらば餘程の高價のものであります、私が感心しますのはキユトリー夫人であり

ます、この人はポーランドと云ふ亡國の御產れの方であるが頗る美人で又非常な勉强家でキュリー博士と結婚して夫妻相扶けてこの驚くべき發見を爲されたことです。

斯う云ふやうに化學的——理學の研究が進んで新らしい原素が出來、新らしい事實が發見されて、さうしてそれを醫學の方に應用して、我々が其御蔭に由て新らしい方法を見出して、今まで癒らぬ、不治の病氣だと云ふやうな疾病を癒しつゝ行くのが今日の時勢です。私共は常に新らしい所に眼を著けて使うて醫學の進步を遲らせぬやうに努めるのが私共の義務である、而してそれに依つて幸に疾病が治り、人類の健康が保障されて行くならば非常な幸福なことで又其處に醫學の貴い所があると思ひます、詰らぬことを饒舌りまして失禮を致しました。

叢談

牛痘法の普及

ドクトル　富士川　游

牛痘法は、今から大凡百餘年ほど前に、英國の醫家のエドワード、ジエンナーといふ人が發明した方法で、牛の痘瘡の漿液を採りて、人の身體に植えて、天然痘を豫防するの效果顯然たるものである。

ジエンナーは偶然のことから、牛乳榨が天然痘に侵さるることが尠ないと云ふ事實に目をつけ、辛苦して研究した結果、牛痘の漿液を人體に植えるときは、天然痘を豫防することが出來るといふことを發見した。

一千七百九十六年五月十四日、ジエンナーは自家發明の新法を始めて人體に試み、これに關する著述を

公にして、牛痘法を唱道した。しかし世の人は一概にこれを排斥し、多數の學者もこれを非難したのである。

ジエンナーの研究と唱道とは、眞面目であつたが、學者の多數はこれを非難して、無稽の妄説なりと排斥した。俗人の輩は、この法を施すを嫌ひて、この法を施すときは、人が牛になるとまでに言つた。

しかし、ジエンナーの發明は事實であつた。牛の痘漿を採てこれを人の身體に接種するときは、これによりて、後日、その人の天然痘に侵さるることを防ぐの效果があるといふことは、遂に認めらるるに至つた。

ジエンナーの發明から今日まで、百有餘年になつた。その間に黴菌學が大に開けて、血清療法といふものが新に興り、ジエンナーの牛痘法も、效果の著しい血清療法として、學者の間に承認せらるるに至つた。

今日でも、西洋にはこの牛痘法に反對する一派があつて、牛痘法を施すことを嫌ふために、天然痘の流行に際して、多數の病者が出來ることがある。現に英國にはこの類の頑固者流が尠なくない。

現にジエンナーの郷里のグロウスターシャイアでは前年天然痘の大流行があつたが、これは全く牛痘法に反對してこれを行はぬものの多かつたためであつた、去年獨逸にも同樣の例があつた。

今日から見れば、牛痘法の效果は、疑ふべき餘地が無いにも拘らず、現に西洋諸國でも、この方法に反對するものがある位であるから、その方法が新に創められた時に、世人がこれを信用しなかつたのは無理のない事である。

我邦にジエンナー牛痘法が創めて傳はつたのは文政の頃であつた、しかしこの時にはその法が十分に行はれなかつた、天保の末にも牛痘苗が和蘭から傳はつたけれども、この時にも、この法は十分に成功しなかつた。

所が、弘化四年になつて、鍋島閑叟侯が、西洋に牛痘法といふものがあるのを聞かれて、その醫員楢林

宗建に內命を傳へ、牛痘の苗を和蘭に求めしめられたのが動機となつて、この法は我邦に行はるるに至つたのである。

楢林は代々通辭の家で、常に蘭館に出入して居つたから、鍋島侯の命を承けて、甲比丹レフイソンに托して、和蘭より牛痘の苗を取寄すことに盡力した、レフイソンは早速その旨を本國に照會した。

翌る嘉永元年七月入港の船にて、醫員モーニッケといふもの、牛痘の苗を携へて來朝した、直ちに二人の小兒にその痘漿を接種したが、不幸にして、その結果は不良であつた。

更に、牛痘の苗を本國に求むることにした。翌年(嘉永二年)七月入港の船にて、牛痘の苗が到著した。これを三人の小兒に接種した、二人は不感であつたが、一人は立派に感染した。

楢林からその事を鍋島侯に報ずると、侯はその醫員の子、及び公子(淳一郎)貢姬(慈貞院夫人)に接種せしめられた、所が共に好結果であつた。これが我邦に牛痘法の行はれた第一である。

豫め西洋の事を聽き知つて居つた輩は、もとよりその方法の效果の著しきに驚いたが、世人の多數はこれを夷狄の魔法として、排斥し、力をつくして、その法の世に行はるることを妨碍した。

この時に方りて、牛痘の普及に熱心なる醫家の苦心は一方ならず、長崎に牛痘の苗が傳はつてから、數月ならずして、牛痘の法は京都、大阪、江戶の諸地方に傳はり、大阪では緒方、京都では日野、江戶では桑田など、牛痘家で名高かつた。

ここに寫したる繪は、當時牛痘種法熱心の醫家が、その方法を普及せむが爲に、廣く世間に配布した引札の一つである。この類の引札は他にも尙ほあるけれども、ここには、一例を擧ぐるのである。

此の如くに、熱心なる醫家の盡力により、牛痘の方法は、種々の非難と、壓迫を受けつつも、その術は速かに、普及して、その後の天然痘の流行の時に實效が現はれて、遂にこの方法は世人の信賴を受ける

やうになつたのである。

不死不滅

醫學士　中村芳助

凡そいきとし活けるもの、孰れも死を厭はざるはない。尤も人類以外の生物は、死と云ふ觀念が無いやうであるから、死ぬるのが厭だと云ふ考はあるまいと思ふが、併し少なくとも死に至る條件――それが爲に死に至ることもあり得べき事柄、例へば撃るゝとか、刺さるゝとか、燒かるゝと云ふやうなことは厭がる。これも決して死では、大變だからと云ふて厭がるのではない、單に痛いから或は苦しいから厭がるのではあるが、水面に浮べる棒振蟲の足音に驚いて水底に沈み行き、地上に蠢く青蟲が子供の惡戯に逢ふて身を圓く縮めると云ふ如き反射的の運動は、既にその一階段である。魚の人影に驚き、龜の首を甲に引込めるもそれである。更に鳥類に至つては、若しこれを手に握るならば、如何に驚怖の動悸を早めるかゞ分かる、而して驚きの叫を發する。それより漸次高等の哺乳動物に至れば、單に反射的に危害を免れんとするのみならず、實にその來らんとすることの何事なるかを豫知してこれを避けんとするのである。獵師が猿を撃たんとして、その哀訴するが如き狀あるを見、そゞろに同情の念起りて狙も狂ひ、さては撃つことを止めたなどゝ云ふ話もある。動物心理の研究は別問題として、要するに生物悉く人類程に發達した精神を持て居るものと假定して見る時には、禽獸蟲魚の運動には、何れも死ぬることを厭がる、これを免れやうとする意味が讀める。これをもう一歩進めて、人間の情をそのまゝ動物に當嵌めれば、佛教流の三世因果が出來上るのであるが、こゝにはそれ程面白い話をする譯にも行かぬ。扨て吾々人類はどうかと云ふに、眞に死を厭ひ死を怖れると云ふのは、實に吾々人類に至て始めて起る所の觀念である。尤も小兒には矢張猿ぐらゐの怖れ

しかない、眞に死と云ふ觀念はまだないのである。併し漸次生存の慾望が強くなると共に、一方には死あることを悟つて來るので、こゝに初めて死を厭ひ死を怖るゝことが甚しくなり、無常を觀じ、悲觀も厭世觀も起るが、何としても死ぬると云ふことには滿足が出來ぬ。そこで宗教となり、哲學となり、未來に極樂世界を眺めて、生存の餘地あることを悦び、種々に理屈をつけてこの生存の慾望に滿足を與へる工夫をする。靈魂不滅説は古いものである。

靈魂不滅説の眞僞は、暫くこれを作つた哲學者、或は宗教家に任せて置いて、兎に角滅することを厭ふ人がこれを信じ得たならば、幸福であらうと思ふ。併し生あればどうしても多少の苦は伴ふものであるから、場合に依ては矢張滅した方が都合が好さそうに思はれることがあるかも知れぬ。特に地獄などゝ云ふ此の娑婆よりも一層苦痛に滿ちた所あるに於ては、なか〳〵心配である。千人が千人其所の移住民となりさうである。是非人手にすがつて、多少賄賂を使つても極樂と云ふ方に移住さしてもらひ度い。そこでこれには又それ〳〵請負師があつて、今日でも相應に繁昌して居るやうな次第であるが、靈魂と稱するものが不滅であると極印を捺されても、人は兎に角死を免れない。昔は一萬八千歳位の人が幾らもあつたと云ふことであるが、今日の人類に比して長命であつたと云ふべきのみで、矢張一萬八千歳で死んだのである。死ぬることの厭な人には、同じく厭なことで、一歳で死ぬるも厭なれば二萬歳で死ぬるのも厭である。

そこで私は、靈魂不滅説を信じて悦ばれる人のあるのは誠に目出度いことゝ思ふが、不滅を悦ぶ人々の爲に、もう一つおまけに身體不滅説を紹介し度いのである。果して能くこれを信ずることが出來れば、恰も鳥に雙翼あり、車に兩輪あるが如く、始めて完全な不滅滿足の信仰が出來やうかと思ふのである。抑も人間の身體は、もと〳〵一個の細胞が分かれに分かれ、殖えに殖えて出來たもので、一人の人間の

身體の發育は、生物全體の進化發達の道程を縮めて繰返すものであると云ふが、現にまだ細胞一個の生物がある。所謂單細胞體と稱する種類のものである。黴菌類もこれであるが、動物の中にもある。此等のものは、煮るとか燒くとかされる場合は別であるが、自然に死ぬると云ふことがない、死なぬ中に、一個の單細胞動物が二個の單細胞動物に成る、卽ち二つに分かれる、二つが四つに分かれる、その四つが又八つに分かれると云ふ風に、單純にそのまゝ何處までも身二つとなる。それであるから何れが親、何れが子と云ふこともない。兩個全く同體である、何方が古い、何方が新しいと云ふこともない、此世に生れ出でた以來幾百萬年か知らぬが一統連綿として今日に至て居るのである。

此の如く單細胞體の生物には自然の死と云ふことはない。所謂壽命長久不死不滅と云ふべきものである。偖然らばこの細胞が多數相集つて身體を構成して居る所の複細胞體の動物はどうか、例へば人間の身體はどうかと云ふに、その元は矢張り單細胞に相違ないが、それが二つに分れるのには餘程複雜の作用が要る、且つ單細胞動物のやうに全く二個相分離して直ちに完全な一個の人間が出來上るのではなく、それが分かれ〱て增殖し、而かも相連絡して種々相異れる組織を作り、それが又種々に相寄つて樣々の器官を構造し、雜複極りなき發育を經て漸く一個の人間の身體が落成するのである。而して各器官、各臟器銘々分業法で働いて居つて、眼は耳の働をなさず、心臟は胃の働をせず、皆それ〱定つた役目を有つて居る。こゝが卽ち單細胞動物と複細胞動物との異る點であつて、單細胞動物に於ては、一個の細胞が自分の全身であり、それが又直ちに一個の生殖細胞とも見做される。然るに複細胞體に至つては、胴から二つに切離しても二人の人にはならぬ。生殖細胞が別になつて居る、それで學者は複細胞體の動物の身體をソマ細胞と生殖細胞とに區別して居る。ソマと云ふのはソマトーゼのソマで、狹い意味で云

ふ身體である、即ち通常カラダと云ふのはこのことである。このカラダを構成して居る所の細胞は、人體などに於ては、實に非常な數である。而して皆活きて居るのであるが、此等の細胞は幾程增殖しても決して又新なる人間となることはない、例へば乳癌がいくら大きくなつても赤坊には成らぬのである。之に反して生殖細胞は、自然に適當の條件さへ備はれば、これより又新なる人間の全身が出來る、言葉を換へて云へば、又新しいソマに依て包まれることになるのである。斯う云ふ譯で、普通カラダと稱する部分は、年を取るに從つて、種々の原因に由て漸次古くなり、脆くなり、使耗されて、七八十年長くて百年も經てば廢物となつて、總ての働が止むで仕舞ふ、それを通常死と呼んで居る、即ちこの古着を脱いだ時が死である。けれどもこれは全身の死ではない、その人の死なぬ部分は、子とか孫とか云ふて立派な人に成つて居る、而かも完全な身體全部を具へて、丸でその人が蘇生たかと怪まれる程である。

是を以て觀れば、なるほど人間の所謂カラダは古物となつて廢るけれども、その不死の性質は生殖細胞の方に保持されて居て、生々遂に死せざるものであると云はなければならぬ。

これで以て人身不死不滅の理は略ぼ說盡した考であるが、尙は脫棄る古着に迄未練を殘して、それでもカラダが無なつてはなどゝ愚痴を言ふ人も有らうから、其等の人々の爲めに、尙ほ一言その古襤褸のカラダも不滅であると云ふことを附加へて置く。

蓮如上人の御文、殊に有名な彼の所謂白骨の御文章などを拜見すると、如何にも人間の浮生なる相が觀せられる『野外ニヲクリテ夜半ノケフリトナシハテヌレバタヾ白骨ノミソノコレリ』と云ふと、時にとりて如何にも淋しく心細く悲くなる。併し現に白骨が殘つて居る。火葬法が不完全なれば不完全なる程殘る。斯くの如く骨灰は殘るが、其他の毛髮、皮膚、筋肉、神經及び內臟等の諸組織は悉く夜半の煙と成てしまつた、即ち屍體は骨と煙とに變化せしめられ

たが、全く無くなつたと云ふことは出來ぬ、若しこれを疑はゞ、屍體を完全なる器物に入れて、その重量を測定し、次に一滴の水も煙も逃さぬやうに注意して蒸燒か何かにする、而して後に再びその器物の重量を測つて見るが宜しい、恐らく一匁の增減もないに相違ない、これは今日では三尺の童兒も理科の實驗で既に承知してゐる事柄である。これで以て所謂屍體さへも全然無くなるものではない。たゞ變化して姿を易ふる迄であると云ふことが分かる。これは火葬に附した場合であるが、更に死體を野外に棄てゝ、鴉、狼乃至蛆蟲の類に御馳走したならばどうかと云ふに、此場合には直ちに動物の力となり、或は種々の變化を經て植物の體となり、それが又人間の身體を養ふことゝなる、即ち循り環つて生きて働く、無なる所ではない更に死ないと云ふても差支がないのである。

以上の理由を以て、身體の不死不滅を唱へても、決して虛言ではなからうと思ふ。況や靈魂不滅を信ずる人に於ては、此外に尙ほ神となり佛となり、假令階級は低いにしても餓鬼となり畜生となり乃至幽靈となることが出來るのであるから、毛程も損することはない、何れにしても不死不滅は眞理であると謂はねばならぬ。

うしの肉

牛と云ふ獸は、その性質剛健にして而かも溫順、行歩甚だ遲々たれども、又よく百里の遠きを極むると云ふ所より、屢々道話などに引出さるゝ獸である。元は野生のものに相違なきも、既に太古より人間に手馴され、馬と共に缺くべからざる重要の家畜となつて居る。或は耕作に、或は重荷の運搬に使役され、又乳汁を供し、その肉さへも人間の嗜む所となる、實に有益なる動物である。

印度や埃及などには太古より牛の居つたことが分かつて居るが、我邦には何時の頃より斯く飼育された

ものであらか、一寸調べて見なければ分からぬ。勿論神代の昔よりと云ふ人もあるが、更に研究を要することである。兎に角牛の先祖は中央亞細亞が本國で、それより東方の亞細亞、西方の歐羅巴へ蕃殖したものであると云ふ說は眞に近い。これが眞であるすれば、我邦には恐らく西南方の方角より參渡り來れるものであらうと思はれる。今日も尙ほ普通の牛の昔の從兄弟位に當る種々の野生牛が所々に棲息して居る。例へば印度、亞弗利加邊に棲でゐる水牛と稱するもの、或は亞米利加、露西亞の一部に棲で居るバイゾンと稱する種類のもの、何れも獰猛なる野牛の種類である。此の如きものゝ中の比較的溫順なるものが、漸次手馴けられ、飼育せられて人間に奉公をするやうになり、それが其國土の地理的關係に依り、又使役の目的に依て各々特性を具ふることゝなり、近世に至て種々の改良を經て、今日の牛の種類を見るに至つたものであるが、今後益々改良されるに相違ない。

西洋はもと〳〵牧畜の國であつて、昔より盛に牛、羊を飼養し、これを以て主なる財產として居たのである。富める者とは牛、羊を多く所有して居る者の謂であつた、實際牛、羊を以て今日の金錢の如くに使用したのである。從つて昔よりその乳を飲み、その肉を喰ふ習俗である。之に反して我邦人は、肉類としては、主として魚肉を食用にし來れるものにて、地理上正に此くあるべき筈である。故に牛の如きは、專ら耕作に使役し、或は荷物を運搬せしむるに止まり、決してこれを食用に供すべきものと思はざりしは勿論、その乳汁すら人の飲用すべきものとは考へなかつたのである。尤も牛肉を食し、牛乳を飲める例も全く無い譯ではないが、それは僅かに、所謂養生喰、養生飲に過ぎなかつたのである。無病にして此の如きものを食ひ或は飲むものは、穢らはしとして神佛に嫌はれ、冥罰をも蒙るべきものとせられた。然れば一種の食餌療法、所謂養生喰の爲に牛肉を燒き或は煮る場合に於ても、神棚、佛壇を覆ひ、尙ほ

戸外に於て調理したものである。然るに西洋諸國との交通開け、凡そ文物その範を泰西に採るに至つて、獸肉食の習俗も亦輸入せられ、一方西洋醫學の說く所も亦、肉食の可なる所以を敎へ、榮養物として最も價値多く、殆どその缺くべからざる重要品たることを敎へ、盛に食用すべきことを奬勵したるより以來、牛肉は漸く需用食料となり、今や寒村僻陬の老爺と雖も、之を食ふて怪しまざるに至つたのである。而かも之を西洋諸國に比すれば、その消費量は尙ほ微々たるものである。一昨年の東京府の衞生に關する統計中、その屠獸數に就て見るに、牛三萬二百六十二頭、其斤數九百九十七萬四千七百九十六斤とあり。然るに一千八百九十六年中獨逸國伯林府に於ける屠獸數に就て見るに、牛十四萬六千六百〇九頭、犢牛十四萬一千八百六十九頭とあり、即ち東京府の屠牛數の伯林府のそれよりも少なきこと大約八十八分の一である。又我が同盟國たる英吉利に於ては、人口一に付き家畜一頭强に當ると云へるが、我國に於ては、人口十七に對して家畜一頭の割合とは、甚だ心細き感あるを免れない。而かも近頃は、朝鮮の牛を食ひ、尙ほ濠洲の肉を輸入するに拘らず、牛の生產數はその消費數に及ばざるが如き有樣であるとは、益々以て心細き次第である。尤も近來西洋に於ては、各國を通じて獸肉の供給不足を訴へて來た、屢々獸肉の饑饉に出て困難をする。それが爲に種々の政策を講ずるが、何うしても不足を覺ゆる模樣である。斯の如き所より漸く獸肉食を節減すべきことを說き、或は肉食過度の害を唱へ、或は魚肉の大に用ゆべきことを勸め、米食を勸むるものさへある由である。西洋に於ては確かに獸肉消費過度の弊に陷つて居ることを認めるが、然りとて我邦に於ては又餘りに過少である。外聞惡るき程過少である。これは、供給、販賣の不都合な點もあるに相違ないが、元來畜產業が盛でない、殆んど閑却されて居るからであらうと思ふ。然らざれば日本狹しと雖も、今日よりは豐かに牛肉を食用に供し得る筈である。

日本の牛は體は小さい、西洋種の牛は平均高さが四尺五六寸もあるのに、日本牛は四尺内外である、これは國土の相異に依ることで致方がない、單り牛のみではない、人でも馬でも、西洋に較べれば凡て小形である。併しその質に至ては必ずしも劣らぬ。牛も日本牛は體こそ小なれ、非常に强健で、眞珠病とか其他の病氣も至て稀で、肉の味も確に上等である。就中神戸牛の如きは、自慢の西洋牛肉と雖もその味に於て及ばぬと稱せられる。尤も神戸牛と云ふのは、鳥取、島根、岡山、大阪及び兵庫、更に九州地方の牛もあるが、其中の優良なるものを特に神戸牛と稱して賣るので、不良のものは悉く除て神戸牛の中へは入れないと云ふことである。東北は馬の產地で牧牛は振はぬ、而して東北地方の牛肉は實際甚だしく不味であるが、關西地方は自然に牛も多く、牛肉の味も非常に優良である。併し西洋種に較べると何分體が小さく、從つてつぶしがきかない、西洋の肉牛となると二百貫内外が普通であるのに、日本牛は通常七八十貫と云ふ所である。これは是非改良を要することで、肉の味を惡くせずに大きくすることが出來やうと思ふ。人間を引合に出しては善くないやうであるが、體操その他一般の衞生上の注意に依て、近年我邦の女學生の體格の立派になつたことは著明なる事實である。牛とても改良の方法を講ずれば、必ず一層立派なる牛になるに相違ない、强ち混血兒を作るばかりが改良の方法ではあるまいと思はれる。私は我邦の婦人連が、もう少し畜產事業とまでは云はずとも、搾乳業などに眼をつけて、育兒と連絡を取りさうなものと思ふが、更に左樣の企を聞かない、往々相場などに手を出す女はあると云ふことであるが、西洋のやうに牝牛の乳を搾るに妙を得た女は甚だ少ないやうである。偶々亞米利加邊に行て居る日本勞働者の婦人などが、牛乳搾に雇はれると、非常に上手なさうである。新しい女などゝ云ふて惡ほざきをするよりも、ちと牛飼とか乳搾とか云ふ方の眞面目な新しい女が出來て欲しいものである。併

し牛乳に就ては、又改めて話をすることにして、大分牛の誕例になつて仕舞たから、今日は簡單に牛肉のことを少し話して此稿を終る積りである。

牛肉は、外の屠獸も總てさうであるが、その性質は種々の關係に依て異る、同じ牛でも其種類、年齡、飼養法、又屠殺法等に由ても種々の相異を生じて來るものである。廣い意味から云へば、肉と云ふのは、總て食用に供し得る部分を總稱するのであつて、狹い意味の肉、即ち筋肉の他に、骨、內臟、脂肪、血液等の中にも食用に供すべき部分が澤山ある。唯だ皮膚及び其附屬器、即ち爪とか角とか毛髮は食用に供することが出來ない。尙は生殖器は、少なくとも文明國人は食用にしないだけで、全く食用にならぬと云ふ部分は幾らもない。凡て肉類は蛋白質と脂肪に富んで居るので、榮養品として他の物に優つてゐる。特に蛋白を多く含むで居ると云ふことが特有な點である。

肉は生で食し或は煮燒をして食用に供する。尤も生のまゝで食することは、寄生蟲其他の危險があるので餘程注意を要する。殊に小兒には決して與へることが出來ない。肉を調理するのには熱の作用を借りる。即ち之に依て肉を煮るか、蒸すか或は炙るのである。肉は之を炙るときは、殆どその榮養物質全部を保つことが出來るけれども、煮れば蛋白が少なくなる、蒸したものは其中間と云ふ譯である。

又肉の種類部分に依て消化の具合が多少異る、例へば犢牛の腦を煮たものは、胃の內に止まることが最も短かく二時間半、鴨、鵞鳥、兎の肉などは、これよりも三十分乃至六十分長いと云ふやうな試驗があり、同じ牛肉でも、其部分に依て味の善惡し、消化の遲速がある。生肉は煮たものよりも早く胃を去る。

牛肉は、總ての肉類中最も血液に富むで居るもので、その組織は緻密である、既にこれだけでも非常に榮養に富むで居る肉たることを示して居るが、牛肉は平均七二・二プロセントの水分、二〇・四プロの蛋白と一・五乃至五・二プロセントの脂肪を含むで居る。

これが普通最も多く用ひられ又最も味も善く、榮養になる肉であるが、英國のケアンと云ふ俳優は、ある役を演ずる時には、必ず一定の肉を食ふたと云ふことである、例へば殺人者に擬する時には牛肉を食ひ、暴君の役を勤める時には豚肉、戀人の時には羊肉を用ひたと云ふ。肉は又その之を取つた身體の部位に依て一定の相違があつて、各名稱がある。その分け方も各國皆違つて、英國では最も多く種類階級をつける、伯林では通常十六種程に區別し、維也納では二十五程の階級をつけて居る、これは圖があれば一目瞭然であるが、一々何國で何と云ふのは何處の部分であると云ふのは煩はしいから略して仕舞。今食用牛肉の化學的分析の一例を掲げて見る。

	水	蛋白	脂肪
頸部	七三・五	一九・五	五・八
腰部	六三・四	一八・八	一六・七
肩部	五〇・五	一四・五	三四・〇
後方四分一部	五五・〇	二〇・八	二三・三
前部	六五・〇	一九・九	一九・九
舌(新シキモノ)	六三・八	一七・一	一八・一
舌(燻シタルモノ)	三五・七	二四・三	三一・六

これに依て見ると最も脂肪に富むで居るのは肩肉である。故に身體が肥つて困ると云ふやうな人は、肩肉を食べない方が宜からうと思ふ。次に一番蛋白質に富むであるのは舌である。前部や頸部は水分が多く、從て榮養價も少ないが、舌は非常に榮養分が多く味も好いのである。

次に肉の外觀に就て一寸言ふて見れば、一歲牛乃至六歲位までの牡牛の肉は、元氣の好い赤色を呈して居る、久しく空氣に晒して置けば煉瓦のやうな赤色になる。特別に肥やしたものは、肉の間に脂肪が非常に多くなる、所謂マルモリーレンされて、大理石のやうな紋樣が出來て居る而して可成硬い。老牛の肉は、暗赤色で、肉のきめが粗く、強靭である。一歲牛から四歲位の牝牛の犢肉は暗赤色で、纖維が粗く、比較的脂肪に乏しい。特別に肥した犢牛と若い

牝牛の肉は、鮮やかな軟々した、非常に弛緩して脂肪の少ない肉である、肉藥汁を作るには最も適當な肉である。犢牛の肉は、蒼白赤色で纖維の細いのが特徴であるが、殊に蒼白で殆ど白いやうなのは、未だ乳を飲むでゐる犢の肉である。而して肉の脂肪含量は何時も少量である。犢牛の肉は、往々酸いやうな臭がする、特に久しく店晒しにして置けば乳酸が出來て著しく酸臭を發するものである。併し食べるに差支はない。兎に角犢牛の若い肉は蒼白く水つぽく、脂肪も少なく、筋肉の發育が十分でないことが分かる。西洋では隨分好んで小さな犢牛を食するが、我邦の如き貧牛國では、もとより贊成することは出來ない。

育兒

牛乳で育たぬ子供

醫學士　宇都野研

哺乳兒の消化器には、極めて機能力の強いのと弱いのとあります、消化機能力の極めて旺盛な子供は、吾々の眼からは隨分亂暴と思はれる樣な稀釋法や混合物を施した牛乳を與へても、腸胃を傷める事なく美事に發育する、親がなくても育つといふ子供は此の部類に屬するものでありませう、斯る小兒のみを育てた人はどの子供も其調子で育つもの丶樣に早合點して飛だ失策をする事がある、之に反して色々細心な工夫をこらして人工榮養を施しても、ともすれば榮養障碍に陷る小兒がある、只今話さうと思ふ牛乳で育たぬ子供と云ふのも、この後の場合に入る

べき小兒であつて、哺乳兒が其年齡にふさはしき分量の牛乳を飲むでゐても、體重が常の樣に增加せず、一進一退の姿で、唯だ全體に於て極々僅かな體重增加の傾向を示すのみであつて、斯る場合に普通ならば牛乳の分量を增せば、體重も從つて增加するものであるけれども今お話しする樣な場合では、食餌を增しても體重に影響がない、體重の外糞便も亦普通と異なつて、ねつとりして絹漉の樣な性質を失ひ、白茶けたぽろ／＼の濕り氣のない鹿や兎のする樣な糞になり、皮膚の色も蒼白く、充實性も惡くなり、氣分がいらだち、皮膚に癤瘡などが出來易くなる、斯る狀態を獨逸のチエルニー先生が委はしく研究して牛乳榮養障碍と名づけ、今日では又「ビランツステールング」といふ樣な名前もある、元來此の病氣はどうして起るかといふに、牛乳の中の脂肪が病因をなすものと目ざされて居る、然し脂肪の消化や吸收が惡くつて體重の增加しないといふわけではない、脂肪の消化や吸收は常の通りであるが、脂肪と結合して多量の鹽類が排泄せられ、從つて身體が多くの鹽類を失ふため、體重が增加しないのである、（鹽類は體重の增加と密接の關係のあるものである、）上記の糞便を脂肪石鹼便と名づけるのは糞便中の脂肪酸と「マグネシヤ」及び「カルシウム」の樣な鹽類とが結合し所謂石鹼を形成して居るからであります、其他の症狀卽ち皮膚に於ける變化なども全く鹽類缺亡のために起るものであります、この狀態が長く續くと、非常に體重の輕い小さな子供になります、療法はどうしたらばよいかといふに、牛乳をやめて人乳を與へさへすれば何れも皆恢復します、然し人乳は牛乳に比べると窒素や鹽類の少いものであるから、人乳に換へたために、一時體重の減ずる事がある、然し間もなく小兒の身體が人乳に慣れて、體重が增加して來る、其他の症狀も全く消散して仕舞ふ、然しながら強ち人乳を使用せずとも人工榮養に改良を加へて恢復を謀る事が出來る、輕症な場合には牛乳の分量を減じ糖類を增せば目的を達する、然し糖を

あまり增加すると下痢を起す事があるから、糖の外に澱粉質のものを加へる、卽ち稀き重湯を二枚の「ガーゼ」にて濾過したもの、又は二乃至三%位の割合に穀粉(大麥、燕麥等の粉)を煮たるものを水の代りに使用し、之に五%位に糖を加へて與へるのである、かくするのは、この病氣では澱粉や糖類の消化機能力が佳いから、牛乳を稀釋したために失つた滋養分を、之等の品を以て補ふのであります、然し重症の場合には單に牛乳を稀釋するばかりでは目的を達する事が出來ないから、脫脂乳を稀釋して之に澱粉、糖類等を加へて榮養するのである。糖の中で此の場合に適當なのは蔗糖(普通の砂糖)及び「マルツ」汁Xである、「マルツ」汁Xを用ゆれば、體重も增加し、糞便の性質も佳良となり、效果最も確實であるけれども、通痢の作用が强いから、生後三ケ月前には普通稀き重湯に蔗糖を二乃至三%位な割合に混じたものを以て牛乳を稀釋し、四ケ月以後は穀粉汁に五%位な割合に「マルツ」汁Xを混じたるものを使用するこれで大抵は目的を達する事が出來る。

小兒の結核

醫學士　K、T、生

結核の恐ろしい事は誰しも知つて居る事で、今更喋喋する必要はありませんが、人は結核にかゝると死刑の宣告でも受たかの樣にがつかりして仕舞て、氣の爲に益々弱る樣になります。然し結核とて決してそれ程恐ろしい物ではなく、隨分多數の人が結核に罹つて居るにかゝはらず高齢迄甚だ元氣で働く人もあるのであります。

結核と云ふ名稱は元來絲の結目と云ふ字から轉じたもので其病變を呈した箇所の肉眼的外觀から付たものであります。御存じの通り其病原卽ち結核菌はローベルトコッホの發見にかゝるもので此病原體が發見されてからは外觀の如何にかゝはらず結核と云ふ名稱は此菌によつて起る病變を指すのであり

ます。

結核の傳染はどうして起るかと申すと素より結核菌が如何して人體に侵入するのですから其本はやはり結核患者の身體に求めねばなりません牛結核の細菌と人類結核のものとは違ふと云ふ說が一般に行はれて居まして牛結核菌は人には傳染しないと云ふ說が多いのであります。

然し此邊はまだ議論の決しない所で或人は牛結核菌と人類のとは同じで甲を變じて乙にする事が出來ると云ふ人もありますし又病理學者には小兒の結核が牛結核菌によつて起る事が多い樣に云ふ人もありますが先づ臨牀家の方から云へば始めに述た通りであります。

偖て之れが氣道を通つて肺に行くのか又腸へ入て腸の壁を通りぬけてそれから肺に達するのかと云ふ事は始めから議論がありまして今に倘確に斷うと云ふ事は出來ないのであります、甲はコッホの說で乙はベーリングと云ふ人の說であります從てベーリングは結核の原因は主に牛乳であると云ふ事に考へ今でも北米の某市では牛乳の檢査を嚴重にしてから結核が減じると云ふ樣な報告も出ましたが日本の樣な昔から牛乳を飲まなかつた土地にも昔から結核があつた樣であるのを見ると全く信用出來ない事になつて仕舞ます先づ今日の所一般に多くは氣道から入て肺を冒すと云ふ樣に考へる人が多いのであります。

それならば何處で傳染するのであらうか例へば生魚を食たらコレラが起つたとか堀井戸の水を飲だらチフス罹つたと云ふ樣な源は此病氣には容易に判然しません――と云ふのは潜伏期が永いので何時傳染したかをさへ知る事は出來ないのであります。

そこで或人は往來で人間の頭の高さの空氣の中に此菌が居りはせぬかと云ふ事を調べたのですが殆ど居なかつたと云ふ事であります、然し今日の樣に多くの人が之にかゝつて居る狀態では何時何處で傳染するかを調べる必要は殆ど無からうと思ひます。

次に遺傳と云ふ事があります遺傳と云ふのは親か又

は親族に結核があつた時に其小兒に結核が起り易いと云ふ事ですが之れは遺傳黴毒と同じに全く親から細菌を受けて生れそれから病變を起すと云ふのではなく、生れて後結核患者なる親なり、親族なりに接する爲に傳染するのであります。近頃屢々此れに就ての統計が報告されますが、母の結核には、小兒の感染する事が甚だ多く、滿一年中に著しい死亡數を擧て居ります。

然らば何程の小兒が結核に感染して居るかと申すと

年齢	〇—一—二—三—四—五—六—七—八—九—十—十一—十二—十三—十四
百分率	九　二〇　三三　三五　五一　六一　七三　七一　八五　九三　九五　九四　九四

即ち年と共に、感染數が增加して遂に十年後になると、百人中九十三乃至九十五人が此病氣に感染した事となるのであります、然し之れも決して結核病になつた譯ではなく、單に感染して居ると云ふに過ないのであります。

此樣に感染して居る小兒は、何時肺の病變を起すか分らない、殊に百日咳及び麻疹に次で、結核を起す事が多いのであります、それ故此樣な小兒は成るべく、肺炎百日咳等にかゝらぬ樣に注意すべきであります。

小兒の結核の病症はどうであるかと申すと、其起る場所によつていろ〳〵でありまして、一般狀態としては瘦削食慾不振、顏色蒼白と云ふ樣な、大人にある樣な狀態を起して來るのが多いのですが、極幼い哺乳兒等でありますと、恰も肺炎の樣な病狀を呈する事もあります。

素人方は、結核と云ふと直に肺と云ひまして、且當抵助からぬものと御思ひの樣ですが、結核は必ずしも肺にばかり來るものではありません、多く見るのは肺の外、骨及び關節を冐すものその、內でも殊に多いのは股關節炎であります。それから淋巴腺結核――これは頸部、氣管枝淋巴腺等を冐すもので、遂に外に破れて潰瘍となる事もあります、昔から腺病性體質と云ふものがありましたが、之れは今日では結核に因するものであると信じられて居ます。

其一々の症狀を述た所で醫者でない方にはお分りになりますまいから略しまして、次に其豫後に就て申しますならば、結核必ずしも不治の難病ではありません、此事は賣藥屋の廣告によく出て居りますが、これは事實であります、幼い小兒であると、結核では殆ど助かりませんが、然し此時は多くは肺炎の樣な狀態になるので、結核と思ふ人は少い程であります、四年五年の後になると、病症が大分大人のと似て來ますから、素人方にも肺病ではあるまいかと思はれる樣になります、從つて病氣も比較的慢性になり、醫の力を加へる餘地が出來る樣になるのであります。

何の病氣でも早く診斷して早く治療すると云ふ事は必要でありますが、殊に結核に於て然りで、早く治療すればかなりよく治癒するのであります。

然し此初期に早く見付けると云ふ事が中々難いので既に結核ではあるまいかと思つて醫者に診せる時は既に既に遲いと云ふ事も屢々あるのであります、又醫としても、今日はツベルクリンを用ひて早く診斷する方法がいろ／＼ありますが、其銳敏なものによつて見ると、かなり健康に見える小兒でも既に感染して居て、上に擧た樣な十年以上になると百人中九十人以上は既に傳染して居ると云ふ結果になります然しこれは結核菌に感染して居るので、今結核と云ふ病氣を起して居る譯ではないのであります。

換言すれば結核菌が一度體中に入つても、最早治癒して仕舞て居るのもあるのです、然らば何處迄を結核患者とし、何處迄を單に感染したものと見るかと云ふ事は、動物と植物との區別が或處迄行くと判らぬと同樣で、そこは醫の常識にまつより外にありません、それ故一人でも外に結核、肋膜炎等のある家では、小兒を常に注意して、少しでも疑はしかつたら、醫師の診斷を受け治療を受ける事が必要であります。

○○結核の治療に缺くべからざるものは新鮮なる空氣と日光とであります、藥も無論必要ではありますが、

藥を飮でも暗い陰氣な室に閉籠て居ては到底治療する事は出來ません、それ故醫は適當の時期を待て轉地を薦めるのであります、第二に滋養ある食品第三に身體的並に精神的安靜も甚必要な條件で、之も醫の指圖に從つて適度の運動と共に行ふべきであります、西洋では結核療養所なるものが多くありまして、海岸、高山等へ適宜醫の指圖に從つて行き、醫の監督の下に生活し、且療養すると云ふ設備があるそうでありますが、日本に尙此樣な設けのないのは甚だ遺憾であります、それから今日多く用ひられるのはツベルクリン療法であります、之れは大人小兒共に行はれるもので、私も僅の經驗を持て居りますが、病者が漸々快方に趣く事を事實であると信じます、然し之れも進んだ結核には多くは效を奏せぬものであります、之も詳しく申せば難かしい理論になりますから省略致します。

何れにしても結核は恐ろしいが人の考へる程恐るべきものでなく、治癒せぬものではありません、唯以上の衞生上の注意を第一とし、醫の治療を受ける事が必要であります。

牛の結核と人の結核

結核と申します病は、御承知の通り人間に非常に多く、廣く蔓延して居りまして、大部分これが爲めに生命を取られる、或は生命を縮められて居ります、誠に厄介な病氣で御座いまして、傳染する、子孫にも虛弱な體質を遺しますので、文明諸國に於ては、全力を盡してこれが豫防撲滅の方法を講じて居るのであります。我國に於きましても、これからそろそろと豫防法を講じ始めさうな模樣が見えるのは眞に目出度いことゝ存じます。

婦人衞生會の會員は勿論、婦人衞生雜誌の一般講讀者諸君も、結核とは如何なるものであるか、其原因、症狀、豫防法及び療法上の注意に至るまで、既に幾度か、御聞きになり、御讀みになつたことゝ信じ

ますから、今日はそれは申上げません。又近來は小兒の養育法に就ては、何方も非常に御注意をなさるやうになつて參りまして、從つて牛乳の需用も多くなり、牛乳の性質に就ても嚴重に吟味せらるゝやうになりました、これは誠に結構なことで御坐います。付きましては牛乳の事を可成廣く詳しく一度お話しして、皆樣の御參考に供し度いと存じますが、それも今日はその暇が御坐いませんので、只婦人衞生記者の強ての請求に依りまして、本年は丑年であるから何ぞ牛に緣のあることを書け、而して育兒欄に書けと云ふ注文に應じ、ほんの責塞ぎに斯樣な題を掲げた次第で御座います。

偖て結核病と云ふものは、非常に人間に多いことは、前にも申し上げた通りで、ある學者は、人間に結核は付物だ、何れの人間も結核に罹り易い素質を有つて居る、のみならず殆ど何れの人間も幼少の時分には結核に罹るもので、身體の發育と共にそれが自然に治癒する、つまり結核に打勝つて成長するものであるとさへ申して居ります。所が結核は決して人間專門の病氣ではない、結核菌は種々の哺乳動物を侵すのであります。併し人間と牛の身體が最も棲みよいものと見えます、實際牛には隨分これが多い、幸ひに日本の牛には尠ないと云ふことでありますが、併しある、而して牛は、今日では人間の爲には非常に有益なる家畜となつて居りまして、荷物の運搬に、或は耕作等に使役致しますから、常に人間に近接してゐる、加之ならず近來は盛に牛乳を飲用し、又牛肉を食用に供するやうになり、特に小兒に牛乳を飲用せしめ、或場合には全く牛乳を以て小兒を哺育することが行はれます。宜しくないことで御座いますが、西洋邊では、母の乳がありながら、わざ／＼牛乳を以て小兒を育てる惰弱者が澤山あると申すことで御坐います。斯うなりますると、人間と牛とは、ますます密接の關係を有て來ますので、牛の病氣にも注意しなければならぬことになります。それで現今では、食用に供する牛肉、牛乳に關して、それ／＼取

締の規則を設けて、嚴重に檢査を致して販賣せしむることになつて居りますが、こゝに一つ大問題が起つたので御坐います。それは牛の結核と人間の結核とは、同一物であらうか、異つたものであらうか、又牛の結核は人間に傳染するものであらうか、傳染せかぬと云ふ其關係でありして、これに就ては近年非常に研究した人もありますが、未だに學者の説が區々になつて居るやうであります。然しこれは決して等閑ならぬ問題でありますから、これに就て先づ最も穩當の説と思はれるものを一つ御紹介致して置きます。

それは斯う云ふのであります。普通の哺乳動物に蔓延して居る結核、特に人類と牛類とに傳染する所の結核菌は同じものである。併し同一結核菌であつても、同種類の動物の體内に於て、幾代も代を變へる中には、自然そこに一定の特有性が出來て來る、即ちその形態上にも生理上にも多少の差異を生じて來る、つまりそれ〳〵の特性を具へて來るので、斯くして得た所の特性は又種々の條件に由て變る、斯樣な譯からして、所謂チープス、ボビーヌス(牛類型)チープス、フマーヌス(人類型)と云ふ結核菌の型が出來たのであります、その牛類型と申しますのは、牛類の生體に生存するに適合した結核菌でありまして、一般に草食動物に向つては大變毒性が強いけれども、人類に對しては毒性が頗る弱いのであります、けれども常に幾度も之を飮み、又多量に嚥下むと云ふやうな場合には、矢張人類にも傳染する、殊に小兒などには傳染し得ると云ふのであります。

次に今度は、人類に適合した結核菌は、どうであるかと云ふに、人類型結核菌、特に肺病患者より出た所の菌は、牛類に對しては餘り毒がない、一度人類型を得た結核菌は、通常牛には病氣を起さする力を失つてしまふのであります。但しこの結核菌を牛に接種するとか、或は牛が嚥む場合には、體の一部分に故障を起し或は腺の變化を起すことがありますけれども、大抵無難に經過するものであります。之

に反して、この人類型の結核菌は、人間に對しては非常に傳染力が強い、これは我邦の如く牛結核も餘りなく、又小兒の榮養に牛乳を用うることの稀な國に於ても、結核傳染が頻繁で、且つ重症のものが多いのを見ても分ります。

斯樣な譯でありますから、小兒保護の目的を以て牛結核に對して用心するのは結構なことでありますけれども、少なくとも日本に於ては餘り心配する必要はなからうと思ひます。現に乳を榨る牛の健康診斷を行ひ、其乳も檢査して居りまするし、且つ今申します通り、縱令牛に結核が有たからと云ふても、それは殆ど人間には害がない、多少の危險があるにしても、乳を煮て飲用せしむる分には小兒と雖も、決して危險はない、安心して盛に牛乳を用ひて宜しいことゝ存じます。それよりも結核豫防は、專ら人から人に傳染するのを防ぐにあります。殊に家族間の傳染が危險である、我邦の小兒の結核は、牛乳より傳染した牛結核に由るのではありません。大抵親及びその周圍の人々より感染したのであります。これが最も危險である。肺に結核の病竈があつて、それが氣管の方に通じて居つて呼吸する每に無數の結核菌を吹出す人と同居することは、小兒のみならず成人に對しても甚だ危險である。如何に健康な人でも、始終結核菌を飲むでゐては、遂に之に抵抗し得るものではない、何時か侵されるものと思はなければなりません。

育兒者の心得概略（承前）

宮本仲

牛乳調勻法に次いで、其溫度を一定する事も亦た肝要の義に候人工にては天然通りに致すは六ケ敷きことなれども、出來得る限り母乳と同等の溫度に始終相保たせ申度候、即ち三十七度強位が母の血溫に一致すべく候、併し人工なれば實際に平等溫を保ち候事は困難故、多少の變化は據なく、唯だ大なる誤

りの無候様にと御注意あれば宜し。此事は些細の様に候得共甚だ肝要なることにて、しかも却て手落の有り易き點に候、大事は誰も氣附き候得共細事が却て大害を結果し候事も有之可候間、御召使等には能能御注意御申附有之度候、殊に御在處若くは私鄕里など、寒氣酷烈なる處に於て然りと存候、例之ば乳兒が哺乳罎の故障若くは何等かの都合にて哺啜時間を長く費し候事往々之れあり、其長き時間の爲め嚴寒等なれば、乳汁忽ち冷却を始め、終半分は水の如くに相成可申それを知らずして飲ませ候得ば遂に疾病卽ち腸加答兒等を起さしめ候ことに立ち至るべく候、澤山の病兒を視居候私共には其例證往々に認め申候、東京の溫度にして、尙且つ此過ち有之候位なれば、御地などにては殊に御注意の要點と存候故に、冬期は罎を綿若くは「フラチル」等に包み、放溫を防ぎ候、様致度、加之餘り啜乳時間長まり候と認められたる際は、一應乳汁の溫度を御改め可然存候、且つ又溫熱過ぎたるも害に候。

抑も飲食物の溫度と申すものは、中々大切のものにて人の精神を愉快にして、食思を勸め、従つて消化をも促し申候こと〻存候、卽ち溫度に依りて、食物の味が變化致し候事は既に皆様の御實驗通り、如何なる名料理なりとも、その品種に適當したる溫度を保たざるに於ては、甘美の味は更に生せざるものと存候、同じ米飯にても炊き方と溫度との異なる毎に其味に良否の差別を生じ、其差別が人々の精神に美感、若くは不快を與へ候事は私が今更喋々すべき要もなく分明致し居候然れば、如何に哺乳兒たりとも冷き乳汁など與へられ候ては、不快感極り無、加之胃腸孱弱なるが故に、疾病を起すも亦た無理ならぬ事と存候。

却說以上の如く保育候て、追々離乳の期に近つき候はゞ、粉質食料に慣れしむる事を準備と致し度候、離乳期と申すは小兒既に第一二類齒を追々相生じ、消化機も完全に熟し候て、乳汁に因らざるも能く成長を遂げ得べき時期を定めたるものにて、卽ち生齒

期は普通第七八ケ月に初まり、其れが五類に分れ順序に發生致し、先づ一二類齒は大凡二三週日の少憩ありて繼發致候、其頃に至れば粥汁葛湯等より初めそして誕辰頃には稀粥をも徐々に與へ始め申候、離乳期と申候ても乳汁を全廢せしむといふにはあらず母の乳房を離去する時期といふ譯に他ならず、日本從來の如く母乳に際限無く絡み附け置く樣の慣習は衛生上にも、教育上にも感心したる所に無之、種々の食料に堪へ得る樣に成熟したる消化機となれば、斷然離乳するが母子共々の爲めにて、之を十三ケ月以上十八ケ月平均十五ケ月と致し置候、如何に薄弱不成長とするも通常遲くも二十ケ月を出でぬ事に致度候、併し此時期が飲食相改まり候際故、小兒が兎角消化器疾患に罹り易く候て、中々面倒なる節に候、折角是迄大丈夫に健育された愛兒が此時期に於ける少々の不注意より大腸等の疾患を惹き起し、爲めに意外の虚弱兒と變化せしめたる例なども有之候、此期には食物の種類も大に複雜に傾き申候故、御懇意の醫家へ一々御諮りにて粗漏無き樣御注意有之度候、其成長年月にのみ對比したる單一なる概括論は反て大創の基と爲るを恐れ申候間差控申候、但し要は液體より半流動、有形物と、徐々に移り、而して最少量より初め漸く增量し、又一回より二回三回と追々相進み、決して〻〻一時に急進すること莫かれといふ戒めに御座候、且又た之を進むるには、其生長年月にのみ比考せず、反て其體勢の强弱上に對照して適當法を御實行可然候、實に論より證據にて候得ば、母氏が日々令兒の狀況を細大漏さず御實視被成候、其上にて養料の適度を御進め成され候は、却て書物上にのみ標準據して御取計ひ相成るよりは慥かなる事かと存候、然れば兒童の機嫌や、成長や若くは便通消化等皆な御注意にて順調なりと御認めの節は、是れ其養料が適當して其度を進め候て宜しき證跡に候故、追々と食物の性質、量度等御增進致され可然と存候。

先づ試に離乳期の食物を冗贅ながら列擧致し見申候

卽ち、葛湯、粥汁、糜粥、粥、雜炊、熟煮したる温飩、麪麭等又副食には「ソップ」半熟卵黃、竝に其類品、魚類及び牛鳥、肉類は能く摺り潰したるものより始む但し淡泊なる小魚類、小鳥類幷肉など殊に宜し、豆腐も絹漉し特に宜し、而して野菜類は馬鈴薯蕪菁、人參、はうれん草など摺潰し(裏漉尙宜し)たるものより初む、又た野菜汁を造りて雜炊、糜粥等を煮候得ば、味宜しく候、殊に便祕癖の小兒には一層宜し。

調味料は食鹽、醬油、味噌、孰れにても宜し、時々交換可然候、但し餘り鹹きに過ぎたる製法は小兒に適せず候。

其他滋養あり消化し易き食料なれば大概佳適と認め候、但製法は前申したる如き順序にて流動より、固形に進めべく候事に候、餘り脂肪多く甘味勝ち候もの、且つ醱酵し易く酸敗を釀し易きもの等は御止め可然且又香類辛味等は嚴禁に被成度候、而して其一回量は、初め一食匙又は一盞一椀位より始め度く、其度は一日一回乃至朝夕位より始め後に三回に進められ度候、然れど此等食料は最初に在つては牛乳と併用の事に候、通常食事は朝晝夕の三回に候得共、小兒の頃にはそれのみにては空腹を訴へ難止候故、或は一日四回に分ち内一回は所謂お八ッ(三時)の形にて乳汁を主分と致し少し早めの晝食と夕飯との間に置かれ候も亦た佳しと存候、然かも間食なるものは惡弊に候間、可成絕對的に御禁止の方針却て宜しと存候、萬々一止むを得ざる場合には少々の牛乳に淡泊の菓子等にても副へて與へ候事も可有之候併しお八つに併用被成候策が安全にて候、菓子類は餘り甘からざる西洋菓子、例之ば「カステラ」「ウエフアス」等の如きもの宜し「ビスケット」は上製にて殊に能く燒け能く乾きて、口內に入れ粘らぬ樣のもの宜しく候、但し和製の駄菓子的粗製の「ビスケット」は更に感心不仕候、輕燒煎餅等の類も亦た極上製なれば少々宜し、日本菓子は總じて餡氣多く候て小兒に適せず、殊に羊羹鳥羽玉の類若くは潰し餡のもの

など禁物に致し度候、所謂駄菓子類は皆な可厭もの而已に候、飴類就中水飴は過度ならざれば用ひて更に宜しく候。

果物は能く煮たるものゝ汁位少々つゝ妨げ無く候、殊に便祕の習慣には少量を與へる方却て宜く候事有之候、併し多量は胃腸を害すること有之候間御注意可然候、殊に生まもの及酸味多きもの硬きものなどは禁ずる方安全に候。

夜中には既に申す通り禁食を嚴行せられ度候。

飲料たる茶珈琲などは其濃煎せるもの甚だ宜しからず禁止可然併し極めて稀薄なるものを、牛乳に伍し香氣取りとせるもの位は妨げ無之候。

酒類は全く御禁止可然候、西洋人などは麥酒や葡萄酒の少々は嬰兒に與へ候も、日本人として然様なる惡風は學ばぬ方可然と存候、藥劑としての必要なる場合は家庭に於て更に無之と存候。

概言すれば滋養分に富み消化し易きものなれば、食料は備て宜し、但其製法と量と度との注意が最緊要なりと、御承知下度候、これにて飮食物は一段落と致候。

（未完）

家庭衞生

何の爲に衞生を行ふか

此の間に對しては、唯次の如く答へることが出來る。即ち吾々は、生活條件を合理的にし、身體を強健にし、吾々の健康を害せんとする所の無數の敵に對して克く戰ひ得るやうにして、各個人竝に全體の安寧幸福を計らんが爲に衞生法を講ずるのである。

今日の衞生家と云ふものは、非常に廣い範圍を掌つて居るもので、それには六ケ敷い科學的の研究も要れば、技術工藝上の廣い智識も要れば、又團體的能力その他の事柄に就ても知る所がなければならぬが、今日の時代に至つても、尙ほ非常に多數の人々

が、自分の健康に就て無頓著で、その要求を省みぬのは實に驚くべきことである。自分の財産に就ては非常に心配をする、その所有物となれば微々たる損失でも、氣の毒な程口惜しがる、眞の財産たり、眞の所有物たる自分の身體に就て、損害なからんが爲に、衛生法が敎へ且つ要求する通りに、その生活上の習慣を正すことは少しも考へぬのである。

衛生學の研究に依て得た所の事を實際に利用し、その上に築かれた所の安全の大道を辿らうと云ふのには、衛生上のことを心得なければならぬ、多少衛生學の精神を學ぶ必要がある。縱令幾分か不自由を感じ、又多少の費用を増すにしても、若し各個人が、衛生の精神を會得して、之を承知してゐなければ、衛生上の法律も訓示も何の役にも立たぬ。これは各個人に於て、衛生法の要求する所を十分に理解しなければ出來ぬことである。凡て自分に利益になると思ふことには、悦んで助力もし協力もするが、其の利益が隱れて居つて一寸眼に見えぬ事柄に向つては餘り力を添へる氣にならぬと云ふのは、これは人間の性質に基くことで如何とも致方がない。

例へば傳染病の場合にも、不自由であるから、或は面倒であるからと云ふて、屆出ない、或は隱蔽すると云ふやうなことが、今日でも尙ほ間々ある。これは詰り此の規則の意味が未だ眞に飮込めないからのことであつて、若し眞にこれが會得されるならば、必ず此の規則を勵行するに違ひない、恐らくは進んで實行するやうになるであらうと思ふ。

衛生法は、目的に達する手段であつて、決して衛生學そのもの丶勝手氣儘を振舞はうと云ふのではない、寧ろ國民の健康狀態を催進し改良し、一國の能力を高めんが爲めに、個人竝びに全體の人の用に立たうと云ふのである。故に個人衛生竝びに公衆衛生が、一國の内に於て能く理解され且つ良心より眞面目に實行さる丶ならば、其國の國民はそれだけ有力になり、それだけ健全になると云ふことは、決して疑のない原則である。

我邦に於ても衛生學は近年非常の進歩をしたけれども之を實際に應用することは、未だ〳〵行屆かぬ點が非常に多い、殊に一般人民が、衛生の何事たるを心得ぬものが少なくないのは、西洋の文明諸國に比して恥かしいことである、殘念なことである。

特に繰返して言ふが、衛生は決して特殊の學問を振舞はすのではない、偏に各個人の爲に、從て一般に、貴重の財産たる健康を保全し、吾人の安寧幸福の敵を漸次鎭壓しやうと云ふのが目的である。これには隨分努力を要する、各個人の犧牲獻身的の精神に待つ所が多い。

多くの衛生的法規、又その勸むる所の方法は、一見餘計の事のやうに思はるゝことがある、加之ならず馬鹿々々しい事のやうに見ゆることがある。凡て全體を觀て、それが自分に如何なる利害關係があるかと云ふことを觀破し得ぬ人には、此の學問の眞理は何うしても解らぬのである。

何人も衛生的の考を持たねばならぬが、偖てこゝに至るのには長年月を要することで、これには、既に幼少の時より衛生上の智識を養成することが必要である、斯くすれば、將來に於て自然その生活の習慣も合理的衛生に適ふやうになる譯である。然るに又、何事もさうであるが、衛生と云ふことにも弊害が伴つて來る。卽ち妄に衛生、衛生と云ふて、各個人の生活を困難にし、總ての享樂を阻害することがある。これまた其點を明かにして矯正することが必要である。尙ほ一方には、一種の虛僞的衛生があつて、所謂世の山師共が之を利用して俗人を誑かさんとする、而して頗る怪しげなる事を眞しやかに說き立てる。此の虛僞的衛生を防ぐのは、實に各人の義務である、然らざれば、これが爲に眞の衛生が惑亂されて、漸く普及しつゝある所の斯の道が邪路に陷り、國利民福を阻害することが尠くないからである。此邊は特に婦人衛生會の會員諸姉に希望する所である。

卵の榮養價に就て

鳥類の卵を食用にすることは、既に太古の人間も知つてゐたことゝ思ひます、卽ち飛ぶ鳥や、走る獸を捕へるよりも、卵を取る方が骨が折れず、且つ直ちに食ふことが出來るから、確かにその食用としての價値を知つてゐたに相違ないと思はれます。それで卵は昔より今日に至るまで珍重されて來たものでありますが、化學が進步して、卵と云ふものは、窒素を含有して居る成分(蛋白)と窒素を含有して居らぬ成分(脂肪)、並びに鹽類とが、恰も人間の榮養素の需用に適合した成分になつて居ると云ふことを敎へまして以來、益すその價値を高めました。併し卵の含有してゐる榮養素の量で以て、全く人體の榮養素の需用を充すには足らぬと云ふことは勿論である。成人が此の需用を充たさうと云ふのには、何うしても毎日二十個の卵は食はねばならぬ、さうするとこれは可成贅澤で、而かも榮養には不十分である、此外に尙ほ含水炭素物或は無窒素物を以て補はなければならぬのであります。其效果は略ぼ百五十瓦の上等の牛乳に匹敵致して居ります。

さうして見ますると、卵は總ての物を含むで居ると云ふことも、曰く附きの諺であつて、實際卵の分析も之を證して居ります。卽ち鷄卵は、一〇・六の殼、一二の蛋白質、一二・八の脂肪、七・〇の鹽類と六三・九プロセントの水分から出來て居る。

礦物性の成分或は鹽類は、極微量のカリー、ナトロン、石灰土類、クロール、硫酸及び燐酸等でありまして、その燐酸と脂肪の大部分は卵黄の中に含まれて居ります。

新鮮の鷄卵は、神經の榮養品としては最も有效のものであつて、如何なる人工的の神經榮養藥と雖も、其の價に於て、其の效力に於て遠く及ばぬと申しますが、實際新鮮の鷄卵の中には有機的の生命がある、それに必要な物質が備はつて居る、これは確かに人工的の物にては代ふべからざるものであります。け

れども餘り鷄卵の價値を買被つてはなりません、何故なれば、眞に榮養價の議論になりますと、先づ第一さう無暗に鷄卵を澤山用ひる譯には參りません、又一方に於ては其の料理に依て卵の效能が著しく減るからであります。

固く煮た鷄卵の消化が惡いと云ふことは、何人も御承知のことでありませうが、これは詰り固く凝固した蛋白は、胃液の中に溶け難いからであります。此の理由に本づきまして、固く煮た鷄卵は、なるべく胃の中で平等に細かになる爲めに、非常に善く咀嚼して、且つ適當な他の食物と共に食べるやうにしなければなりません。これは其他の卵料理に於ても必要なことであります。鷄卵を味よく、その新鮮の氣味を失はずして食べやうと云ふには、是非半熟でなければなりません。病人の爲には、滋養料として往往生鷄卵を用ひますが、この時には少々鹽と砂糖を加へて、十分に攪拌して用ひるのが最も宜しい、而してそれに尙ほ少量の麵包のやうなものを能く咀嚼して食べるのが適當であります。

鷄卵に就て大切なことは、新鮮であると云ふこと〻、特に善く適當に飼養された鷄の卵であると云ふことでありまして、此に由て卵の價値は大に違ふのであります。卵の腐いと新いとに由て味が異る、又餌の性質に由て異ります。毎日新鮮の鷄卵を用うる必要のある人は、自分で鷄を飼ふか、然らざれば信用の出來る養鷄家から直接に買ふのが一番宜しい。新しい鷄卵の價値は、長らく自分で食べて見た人でなければ正しく評價することは六ケしい。

卵の新しいか古いかを鑑別することは、固より困難でない、透かして見るとか、舐めて見るとか、從來慣用の種々の方法がありますが、鷄卵鏡で見れば內部の小氣泡に依て、全く慣れぬ人にも、その舊く貯へて置いたものであるか、生立てゞあるかゞ分かりますから、別に困難ではありません。尙ほ新鮮なる鷄卵であれば、直ぐ水に沈みますけれども、既に八日以上も經たものは、最早十分底までは沈みません。

更に古いものになりますと浮くやうになります。又注意周到なる西洋の家婦諸君になりますと、鷄卵の兩端を一寸舌の尖で舐めて見て、其の冷たく感ずるので以て新鮮なことを知ると申します。

新鮮の野菜と上等の穀物を以て飼養された鷄は、何うしても味の好い卵を產みます。鷄が不良の水を飲み、又不潔な場所で餌を漁らねばならぬやうに放置して置けば、其卵の味も確かに變ります。

この事實は既に古羅馬人も認めて居ることでありまして。物の味を細かに分ける人になりますと、此の鷄は善く飼養されたものであるか或は止むを得ず自ら餌を漁つて居つたものであるか明かにその味で鑑定することが出來たと申します。それで今日に於ても、舌の鋭敏な人は、其の味覺に依て鷄卵の出所並びに性質を知ると云ふことは、強ち空想では御座いません。

雜報



○諒闇中の年始狀

本年の江戶橋中央郵便局年始狀の取扱は平年より甚だしく取扱數減少したる由にて卽ち昨年十二月十五日より同三十一日迄の東京市內の引受數六百二十九萬二千八百三十七通各地よりの到着數三百十六萬五千九百三十通なり之を前年同期間の取扱數東京市內の引受數千二百十三萬四千七百六十五通各地より到着數七百二十八萬七千四百十七通に比し引受高四割九分四厘減到着高五割六分六厘減なり更に本年一月一日より三日迄の郵便物取扱數（年始狀も包含す）は到着數五百九十九萬四千六百〇四通配達數九百三十一萬五千四百三十八通にして前年の同三日間に於ける取扱數到着七百六十四萬七千五百八

十二通配達千六百四十四萬三千六百六十八通に比して到著二割一分六厘減配達四割三分三厘減なりと。

○麹町診療所設置

濟生會にては大正元年八月以來深川本所淺草下谷小石川の五ケ所に診療所を設置し救療事業を開始せるが十一月二十五日更に芝診療所を設置せり開所以來の救療人員は四萬五千百六十六人施藥の延人員は實に十三萬人の多きに達したるが更に麹町診療所（富士見町四丁目十四番地）を開設すべく準備中の由にて同所は既設診療所と同く外來者の施設救療を行ふ外約六千名の入院患者をも收容し得べき設備あり二月一日開所の運に至るべしと。

○細民部落の改善

過般內務省內に開かれたる特殊部落改善協議會にて決定し漸次實施せらるべき改善方法の中に左の各項あり、同省にては本年度よりこれが經費を豫算に計上し、各府縣に對し補助奬勵をなして以て其の實を擧ぐる計畫なりと

一、居宅の建築に改良を加へしむると同時に大に浴場の設備を奬勵し併せて衞生思想の普及に努むる事

二、部落より適當の人材を選出して醫學專門學校に入學せしめ卒業の曉は相當の年限內專心部落の爲めに盡くさしむる事

三、産婆の養成を計る事

四、赤十字社支部其他の機關に於て看護婦の養成を計る事

○赤十字の金員寄贈

日本赤十字社は、赤十字萬國共同の主義に基き、巴爾幹交戰國及び伊國赤十字社に對して、應分の助力を與ふるに決したるも、土地遠隔、言語風俗亦大差あるを以て、救護員若は救護材料を送りて傷病軍人を救護するは、却て彼我の不便なるを思ひ、希臘、塞耳比、土耳古、勃牙利、黑山國各赤十字社へ金一千フラン、伊國赤十字社へ金二千フランを寄贈したり。

○小公園設置計畫

市內の空地を利用して設置する事となりたる小公園八ヶ所の內左の四ヶ所は愈〻大正二年度に於て著手する筈にて豫算に計上せり其他の土手公園若宮公園鳥越公園淺草橋公園は自然來年度以降に著手するに至らん。

▲數寄屋橋公園（數寄屋橋外）九百四十四坪▲虎之門公園（金比羅神社前）千百四十九坪▲蠣殼公園（土洲橋永久橋間）四百二十坪▲今戸公園（吉原土手下）千百三十九坪

○東京出獄人保護現況

本會特別賛成員たる原照胤氏の主管せる東京出獄人保護事業第十六年報左の如し（大正二年一月十一月調査）

被保護總員　千九百十三人

本事業は明治十六年に創始し試業數年に三百〇五人を保護し後明治三十年英照皇太后陛下崩御大赦御施行に際し赦免出獄者保護のため保護所を東京に設き之を經營なせり依て例年當御祭日を期し奉り事業成績を公にし以て可憐同胞の蒙りたる恩澤の一斑を報じ之を本事業賛助諸氏に敬告す

被保護出獄人總員　千四百二十八人

（自三十年一月至大正元年末）

●●罪質　强竊盜　一、〇〇五　殺傷　八九　放火　五一
貨幣僞造　六　賭博　一〇　賣淫　一四二
浮浪　一二五

●●犯數　初犯　七三〇　再犯以上　六〇八　十犯以上　七四
數十犯　一五　百犯以上　一

保護成績

	男	女	計
保護中の者	二二	一	二三
府下居住自活者	二三九	三六	二七五
地方居住自活者	四八二	七三	五五五
死亡者	一三三	一二	一四五
感化院其他の機關へ轉移せしめたるもの	一五	―	一五
轉居後所在不明	一四八	六五	二一三
保護所より逃亡者	五八	一八	七六
再犯者	一〇七	一九	一二六
計	一、二〇四	二二四	一、四二八

末項三を不良成績と見れば

良成績十分の七　不良成績十分の三

當年間に於て收容したる新被保護人は三百三十八を算し例年に比して貳倍の增加なり是れ恩赦免囚及び微罪不起訴放釋者浮浪者の保護に於て激增したるものなり當事業は襲に明治三十八年先帝陛下

皇太后陛下には本事業の成績佳良の趣被聞食思召を以て御手許金御下賜の光榮を荷ふたるに客年又各皇族方御一同より御奬勵のため御下賜金を蒙りたり畢竟同情諸氏賛助の後援によることなりと雖ども誠に恐懼只感泣の外あらず一層努力聖旨に副ひ奉らんことを希ふ次第なり

近年餘力を以て試みたる二保護事業の成績左の如し

被虐待兒童被保護者　六十七人

（自四十二年五月至大正元年末日）

年齡最少　生後一ヶ月　最長　十三年

保護成績

	男	女	計
保護養育中のもの	七	四	一一
内｛上毛孤兒院二、東京養育院二、同安房分院一、岡山孤兒院一、大阪博愛社一、福田會一、豊橋育兒院三、			
安全なる養育に歸著せしめたるもの	一〇	一四	二四
死亡したるもの	二	三	五
警告を與へ養育を監視しつゝある者	七	一一	一八
監視中養育者の所在不明となりし者	四	五	九
計	三〇	三七	六七

浮浪兒童被保護者　百十三人

（自四十四年一月至大正元年末日）

内　男　九六　女　一七

保護成績

	男	女	計
施療せしめたるもの	九	二	一一
歸國せしめたるもの	三六	二	三八
就職せしめたるもの	二七	九	三六
寄宿舍其他の機關へ轉移せしめたるもの	一六	二	一八
死亡	一	一	二
逃亡	二	―	二
所在不明	五	一	六
計	九六	一七	一一三

經費　當年の寄附金總額二千四百四十六圓あり此外各宮殿下御下賜金及英皇族コンノート殿下御下賜金は基金に編入す

○濟生會の現況

寄附申込金額二千六百萬圓の中實際收入せしは七百二十餘萬圓にして目下東京市中に設置せる濟生會直營診療所は下谷、淺草、本所、深川、芝、麹町、四谷ノ七ヶ所にして各診療所の患者は毎日平均七八十名に及び各地方にても大抵夫れ相當の設備あらざる

無く唯だ宮崎長崎及び沖繩の三縣は未だ救療の設備具はらずと。

廣告

○婦人衞生會初例會

例年催さるべき新年會も、諒闇中のことゝて本年は極めて質素に普通の例會を開き、細川風谷の講談（大鹽平八郎瓢簞屋の裁判）にて會を閉ぢ、別室に於て茶菓の饗あり、歡談に時を移して四時過散會したり、因に當日出席役員の姓名を記すれば左の如し

濱尾作子　守屋千代子　羽田三緒子
山本多穗子　岡田德子　宮本樂子
鳩山春子　田村淸子　高橋孝子
（以上出席順）

○本會入會者

○事務所申込
●岡山市七番町八藤原久米吉方　通常會員　栗原喜美子
○宮本まん紹介
●大阪市北區西野田一六ノ六六五　同　小瀨よし子
●四谷區豐住町七八　同　小瀨しづ子
○莊司氏紹介
●本鄕區新花町後藤眼科醫院　同　後藤てつ子
●神田區小川町六八　同　本間たつ子

○轉居

●小石川區巢鴨町四四へ　今田初子
●本鄕區湯島一ノ七へ　松山鐵三郎
●名古屋市大曾根八軒屋町三へ　飯島綾子
●鎌倉大町四七八　迫水吉子
●麴町區三番町一一へ　內山訓子
●福岡縣小倉市紺屋町一四八へ　勅使河原きみゑ子
●名古屋市中區南伏見町二ノ一五一ソ號三七へ　松山馨子
●長野縣松本市今町白板通へ　柏原ちか子
●麻布區笄町一八〇へ　南部きし子
●牛込區築土八幡町三二へ　小松いさ子
●牛込區市ヶ谷佐土原町二ノ一へ　高木鐐子

大日本私立衛生會雜誌

一部 金貳拾五錢　一ヶ年十二冊 金參圓（郵税共）　會員ニハ無料頒布ス

本誌ハ全國同胞ノ健康ヲ保持増進シ一ニハ衛生上ノ智識ヲ普及シ一ニハ衛生上ノ施設ヲ翼賛セントスルノ目的ヲ以テ發行シ明治十六年創立以來年ヲ閲スルコト三十、號ヲ重ヌル事三百五十餘、毎號發行スル部數ノ如キ實ニ七千ヲ超ユルニ至レリ而カモ其載スル處ノ記事悉ク斬新ニシテ能ク時宜ニ適シ且ツ衛生上ニ關スル諸種ノ新法規ハ掲ゲテ之ヲ遺スナキヲ以テ醫家衛生家ハ勿論市町村ノ自治體ニ於テ衛生ニ從事スルモノノ參考トシテ缺クベカラザル良誌タルハ世已ニ定評アリ加フルニ家庭ニ於ケル衛生上必要ノ事項ヲモ網羅シ殊ニ文意簡明ニシテ何人ニモ講讀シ得ベキガ故ニ毎家亦之ヲ備ヘテ利スル所必ラズ尠少ニアラザルベシ本會々員ハ會費トシテ毎年金貳圓ヲ納メ雜誌ノ無料頒布ヲ受ケ得ベキガ故ニ會員トシテ入會セラルルノ利益ナルハ素ヨリ論ヲ俟タズ而カモ何人タリトモ入會スルコトヲ得ルヲ以テ術テ入會セラレ國家衛生上及個人衛生上ニ一臂ノ援助ヲ垂レ賜ハンコトヲ

○大日本私立衛生會規則摘要

一本會ノ目的ハ全國同胞ノ健康ヲ保持増進スルノ方法ヲ討議講明シ一ニハ衛生上ノ智識ヲ普及シ一ニハ衛生上ノ施政ヲ翼賛スルニ在リ

一本會ノ目的ヲ賛成履行セント欲スル者ハ何人タリトモ會員タルコトヲ得

一會員ヲ分チ名譽會員、終身會員、通常會員トス

一終身會員ハ一時ニ金貳拾圓通常會員ハ一箇年金貳圓ヲ納ムルモノトス

一會員タラント欲スルモノハ入會申込書ヲ本會事務所ニ差出シ同時ニ終身會員ハ金貳拾圓通常會員ハ該期間ノ會費(一期金壹圓)ヲ本會ヘ拂込ムベシ本會ハ入會者ニ會員章ヲ贈與ス（郵便振替貯金口座東京五四一九番へ拂込ノ事）

一會員ハ總會及常會ニ參會シ且衛生上ニ關スル事項ニ就キ疑義ノ解明ヲ求ムルコトヲ得

一會員ハ本會ニ於テ發行スル雜誌及報告書ヲ無料ニテ受クルコトヲ得

一會員ハ其家族知友ヲ本會ニ誘致シ講談演説ヲ傍聽セシムルヿヲ得

一會員ハ常ニ衛生上諸般ノ景況ニ注意シ本會ノ參考トナルベキモノハ事ノ細大ヲ問ハズ之ヲ本會ニ通信スルヲ要ス

一通常會員ノ會費ハ年二期ニ分チ上半期(自一月至六月)ハ一月、下半期(自七月至十二月)ハ七月ニ本會ヘ拂込ムベシ

一退會又ハ死亡ノ時ハ必ズ其通知書ニ會員章ヲ添ヘ本會ニ返納スベシ

發行所　東京市麴町區大手町一丁目　（電話本局一一四七番）〔振替貯金口座 東京五四一九番〕　大日本私立衛生會

コーキリン

鈴木博士發見の本品は結核、腺病特に神經衰弱症の最良强壯劑として現時治療界を風靡する有機性燐劑なり

プノイミン

肺結核唯一の治療藥たる結列阿督篤の副作用を除き然も其効果を完全にせしはスパイヤー博士發見の本劑なり

說明書郵呈

東京市日本橋區室町三丁目

三共合資會社

タカヂアスターゼ

高峰博士發見の本劑は効力顯著なる胃腸新藥なり

類似品あり注意

グリコナール錠

北里博士指導佐伯矩氏創製の本品は衰弱者肺病其他慢性諸症に卓効ある滋養新劑なり

說明書郵呈

東京市日本橋區室町三丁目

三共合資會社

私立大日本婦人衛生會役員氏名

會長 侯爵夫人 鍋島榮子
副會長 男爵夫人 濱尾作子

（いろは順）

幹事 鳩山春子
同 岡田徳子
同 山本多穗子
同 松平芳子
評議員 石川貞子
同 濱田捨子
同 服部繁子
同 西舛子
同 緒方悅子
同 小川孝子
同 片山龜子
同 丹波貞子
同 田村きよ子
同 男爵夫人 南部隈子
同 山口貞子
同 古市幸子
同 岸澄子
同 三宅藤子
同 宮下咲子

同 羽田三緒子
同 高木鐐子
同 三浦牧子
同 岩下ゆか子
同 長谷川仲子
同 仁禮壽賀子
同 土肥多越子
同 岡山とし子
同 男爵夫人 加藤鈴子
同 吉武輝枝子
同 高橋孝子
同 鶴原誠子
同 中濱芳子
同 子爵夫人 松井正子
同 伯爵夫人 阿部篤子
同 菊池米子
同 宮本樂子
同 守屋千代子

婦人衛生雜誌代價及廣告料

代價

一冊 定價金貳拾錢 郵稅壹錢
三冊（三ケ月分） 前金郵稅共 金四拾五錢
十二冊（一ケ年分） 前金郵稅共 金壹圓八拾錢

廣告料

一頁六十二行 一行二十三字
壹頁 金五圓 半頁 金貳圓五拾錢
○特別廣告 壹頁金拾圓 半頁金五圓
○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行貳拾五錢

規定

○本誌講讀申込ノ節ハ前金三ケ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵券ニテ貳拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ講讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新舊宿所通知セラレタシ

大正二年一月十七日印刷
大正二年一月二十日發行

編輯者兼發行者 東京市本郷區根津西須賀町九番地 莊司秋次郎
印刷者 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 今井甚太郎
印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 杏林舍

發行所 東京市麴町區富士見町二丁目三十二番地 私立大日本婦人衛生會事務所

賣捌所
東京市本郷區龍岡町 吐鳳堂
同市銀座四丁目 東海堂
同市京橋區鎗屋町 眞明堂
同市本郷區本富士町 明文館
同市同區春木町 南江堂支店
京都市寺町二條南入 若林茂一郎
東京市日本橋區呉服町 北隆館
同市神田區表神保町 東京堂
同市本郷區本富士町 盛春堂
名古屋市本町三丁目 丸善書店

醫學博士　原　榮先生立案講述

通俗　肺病豫防及私宅療養教則

正確有効なる肺結核療養法を行はんと欲せば豫防及養生の根本觀念に通曉するより緊急なるはなし。本書は其根本觀念を社會に普及せんが爲め、在來の養生書と異り最近の肺病療養法をば悉く簡明なる七十餘條の教則に列擧し、一々詳細なる註解を加へ、更に應急處置、食餌法百餘項を附錄とす、實に肺病患者最良の教科書なり。家庭醫、家族、看護人諸君は之れに據り直ちに今日より最も有効なる療養の準備に着手せよ、正確なる療養の着手若し數日を遲るれば肺結核患者治癒の時日は乃ち數月を遲る可し、此書を讀みて尙肺病の不治を嘆ずる者ありや。

全壹册　菊判洋裝美綴　正價金八拾錢　郵稅六錢

吳博士序

東京醫科大學精神病學教室　東京府巣鴨病院醫員　醫學士　杉江董先生述

通俗　精神病講話

全一册

四六判美綴　精巧寫眞版圖畫　多數插入　正價金五拾錢　郵稅六錢

人一度該病に罹るや、直ちに以て恢復の策無きものとして袖手傍觀擅まゝに病魔の蹂躪するに任かす、然りと雖、精神病の原因發生は如何なるものなるかを熟知し、之れが豫防治療の道を講ずるに於ては必しも精神病は毎に至難不治の疾病に非ざることを斷言するに憚からず弊堂茲に見る所あり多年東京醫科大學精神病學教室に於て吳博士指導の下に本病を研究せられつゝある杉江學士に乞ひて本書を公にす。解説平易簡明、一は以て家庭の讀物となり、一は以て醫家教育家の參考書となる、卷中精神病患者の寫眞數十葉を插入す。蓋し本邦に於て此種の書籍は本書を以て嚆矢とす

東京市本郷區龍岡町・振替東京四一八番

發行所　［電話下谷一六七二番　電話下谷四〇七九番］　吐鳳堂書店

[illegible]第二百七十九號（大正二年）　明治四十三年十二月一日（每月一回）